

江川家の至宝



重文資料が語る

近代日本の夜明け

31

遣して分らない点を挙げ質問したところ、カピタンは驚いて、このことは国家秘密のため、教えることは国法に違反しできないと断った。しかしながら、これ

までこのところへ疑問を呈する者はいなかった。実に素晴らしい人物だと賞賛した。

英龍は高島秋帆の門人になり、葦山塾の開設と相まってますますその砲術を研究し、大砲製造および装薬点火法、また堤上架車運術、銃臂孔の製作法を発明するようになった。およそ英龍の攻苦精錬する術は、オランダカピタンも深く賞賛することとなった。

カピタンは公使兼領事といった役割で、当時のカピタンの人名は「ドメタルギュルシス」といった。英龍は従来、着発弾のことについて、砲術書には疑問があるとして、長崎へ家来を派

英龍はこれを聞いて、「彼も人なり、我も人なり」人ができたことは、考究すればできないことはない、一層の努力を重ねた結果、疑問の点は解決し、危険を避ける便利な方法を考え出すことに成功した。葦山塾の塾生も創意工夫をしていたので、松代藩士の片井京助が工夫したという銃の絵が残る。

1854（嘉永7）年4月18日付「書付」で幕府から再び鉄

砲術研究にまい進 成果を広く公表

英龍の努力 オランダカピタンも賞賛

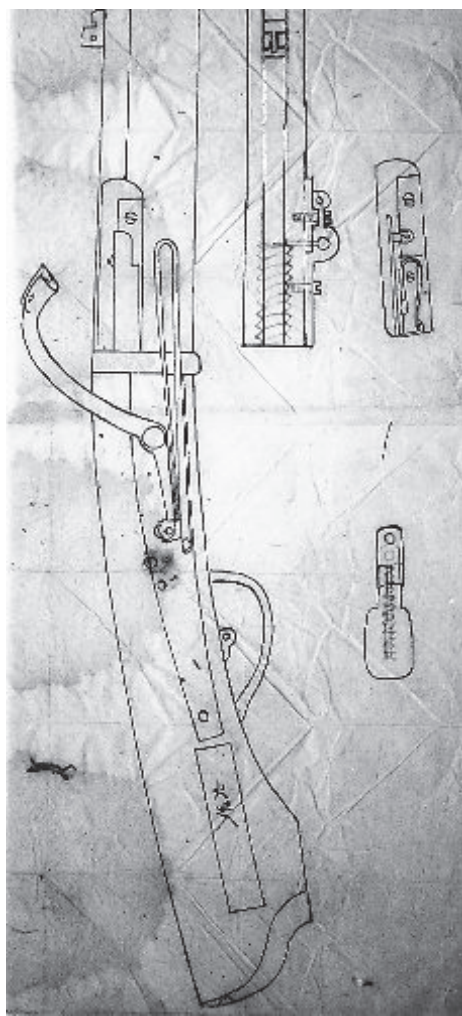
砲方兼帯・与力同心新規付属を仰せ付けられた。このことにより研究は進み、同年閏7月14日付「書付」で、「シケツフスモルチール筒打ち出し破裂玉等を御覧になった三上藩主の遠藤但馬守より、格別御満足だった」と仰せ聞かれた。遠藤家の養子となった遠藤胤城は、幕末に講武所奉行になった。

『具令集覽』の同年の手付・手代一覽によると、中浜（ジョン）万次郎とともに高島喜平（秋

帆の通称）の名前が海防付手代として連ねている。英龍が鉄砲方を兼帯した時期と一致する。また、高島秋帆より没収したセツセルル著「火術書」6冊、パステウル著「兵学書」3冊、カラエンホウ著「築堡策」1冊、「大砲使用説」7冊は幕府書物奉行に差し出した。

江川文庫にはモルチール砲、カノン（艦載砲）、ホーウィツル（野戦砲）など各種の模型と、膨大な大砲の設計図が残されて

いる。設計図は実寸大で記されているが、記名があるのは矢田部郷雲だけである。薩摩藩士をはじめ多くの研究者が携わったはずであり、これだけの研究を行った成果は、反射炉、台場などに生かされた。また、信州松代藩主・真田幸貫からの書状が残り、広く求めに応じて成果の公表、貸出を行っていた。（江川文庫囑託学芸員 橋本敬之）



片井京助が工夫した銃の絵図

江川家の至宝



重文資料が語る

近代日本の夜明け

32

1851(嘉永4)年下田警備の指揮を命じられた江川英龍は、廃止された台場に代わって新たに2カ所の台場を造ること、農兵を採用して警備に当てることを、勘定所宛てに建議している。オランダは50(同3)年6月、オランダ風説書で米国が日本と貿易の意思のあることを告げ、52(同5)年8月オランダ商館長クルチウスが、幕府に総督の書簡を渡し、明年、米

国使節が来航し開国を要求することを予告している。

このように急を告げる情報があるにも関わらず、幕府は樂觀的な観測を続け、英龍の提言を

受け入れることもなかった。

53(同6)年

6月、ペリーを司令長官とする

米国の東インド艦隊4隻が浦賀

沖に来航した。

やむなく大統領

の国書を受け取

った幕府は、ペ

リーに翌春の回

答を約束するしかなかった。

ペリー退去後、幕府は勘定奉

行川路聖謨や英龍らに相模から安房にいたるまでの江戸湾沿岸の巡視を命じた。英龍らは、江戸湾入り口を封鎖できる台場の建設を提案したが、ペリー再来航には間に合わないことから、江戸城を守るための品川台場を築くことを決定した。

台場は当初、ペル著・大鳥圭介訳『築城典刑』に書かれているような典型的な稜堡式城塞を想定して設計したと考えられる。そのことは、江川文庫に保管されている木製台場模型が、サハルド(サバル)の築城書

と全く同じ形につくられていることからもつかえる。

しかし、実際に計画、築造されたのは模型の張り出し部分のなくなった五角形部分が使われた。模型は少なくとも3台製作

され、残されている。

中浜万次郎(シヨウ万次郎)は英龍の手付になる。幕府に蒸気船製造のため万次郎と話をしたいと訴え、これが聞き入れられて53(同6)年11月22日付で老中

・阿部正弘より申し渡しがあつた。普請役格中浜万次郎は江川

手付として蒸気船製造方を取り扱わせることにした。ただし取り締まりを嚴重にするように、と付け加えがされていた。同月25日万次郎の引き渡しがあり、蒸気船製造研究が本格化する。同年薩摩藩から「先御試のため老艘造立被仰付候事」という達書で、肥後七左衛門、梅田市蔵を英龍方へ差し向け蒸気船製造に勤むよう指示があり、さらに、薩摩藩から家来小人格・志々目金次郎、益満新左衛門らを手伝いとして差し出している。

幕府からは翌54(同7、12月に安政元年と改元)年2月16日付書状で、「米国の献貢物

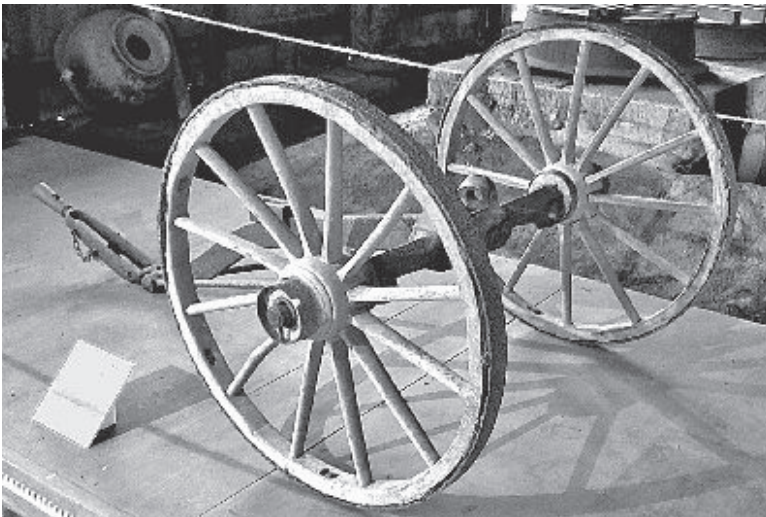
の内蒸気車を他仕掛物に付、其方罷越委細承知すべき」としているが、それ以外にも研究のため米国よりの献貢物であるポートホーウィツル・蒸気車、ほか3品が預けられ、6月30日に渡された覚えで、「研究の上有益なる品拵えの節は、同の上取りかかるように」との指示があつた。

現在主屋に陳列されているポートホーウィツル砲車は、米国製と思われ、ダルクレン発明のポートホーウィツルに用いられたものである。外形が同じ砲身内に施条がない滑腔砲と施条砲(ライフルカノン)の共用であり、ライフルカノンの実寸図面が残されている。また、直径84mmの鑄鉄製の弾芯はライフルカノン用のホチキス型拡張式弾丸である。

下賜された米国よりの献貢物の研究が進み、確実に実用化まで到達していたことが見て取れる。しかし、残念ながら英龍の死去によって、その研究は途絶えてしまった。(江川文庫嘱託学芸員 橋本敬之)

米国船再来に備え 台場や蒸気船製造

献貢物の大砲を研究、実用化へ



ペリーがもたらしたポートホーウィツル砲車

より、残されている。中浜万次郎(シヨウ万次郎)は英龍の手付になる。幕府に蒸気船製造のため万次郎と話をしたいと訴え、これが聞き入れられて53(同6)年11月22日付で老中・阿部正弘より申し渡しがあつた。普請役格中浜万次郎は江川手付として蒸気船製造方を取り扱わせることにした。ただし取り締まりを嚴重にするように、と付け加えがされていた。同月25日万次郎の引き渡しがあり、蒸気船製造研究が本格化する。同年薩摩藩から「先御試のため老艘造立被仰付候事」という達書で、肥後七左衛門、梅田市蔵を英龍方へ差し向け蒸気船製造に勤むよう指示があり、さらに、薩摩藩から家来小人格・志々目金次郎、益満新左衛門らを手伝いとして差し出している。幕府からは翌54(同7、12月に安政元年と改元)年2月16日付書状で、「米国の献貢物

江川家の至宝



重文資料が語る

近代日本の夜明け

33

川文庫の総合調査で、英龍が松代藩（長野県）家老金児忠兵衛に宛てた、詳しいパンのレシピがいたためらわれていた書状を発見した。

そこで、英龍が兵糧としてのパンを考え出したのは、まずカステラのようなものの水分を飛ばしたものを作ろうと考えても不思議ではない。

10年に及ぶ江川文庫の総合調査で、英龍が松代藩（長野県）家老金児忠兵衛に宛てた、詳しいパンのレシピがいたためらわれていた書状を発見した。

これには「カネールコックカステラのような厚さではない『パンの法 西洋人の兵糧』とあり、まず、最初にここから取りかかったことがわかる。書状なので、年号が記されていないことから、これが最初のパンとは言いがたいが、状況証拠から、このパンを作ったのが初めて、後に塩と糎でこねて焼いたパンが出来上がったと考えられる。

松代藩の藩主真田幸貫が海防

1841（天保12）年4月12日は英龍が命じてパンを焼いた日だといつことが『垣庵全集』に出ている。残念なことに江川文庫の資料のなかにそれを記載したものがない。

英龍の母・久はカステラを焼いていた。英龍も幼い時から食べていた。また、英龍はコーヒも飲んでいたらしい。「コーヒ豆をイリ候もの」と注記した筒のような絵が残されている。母がカステラを焼いていたことは、義弟陽三郎から「カステラの詳しい作り方」を教えてもらった礼状が届いていることからわかる。

掛に任命されたので、江川とのつながりを深めていた。パンのことが中心ではあるが、「去る書等の事」と記載されていて、

水分飛ばした甘くないカステラ？

英龍が作ったパン、松代藩にレシピ提供

さまさまな照会のうちの一つである。これが江川文庫に残っているのは、実際には送られなかったのか、また、控えとして残ったのかは不明である。

パンのレシピは大きさ、厚さが実際にわかるよう形を描いた絵を添えて説明している。

一此間お話ししたカネールコックカステラの様に厚くしてはいけな

図のような大きさにして、厚さは（図示）焼なべに油を引きこのくらいにして

（図示）狐色に焼くこと
パンの法 西洋人の兵糧

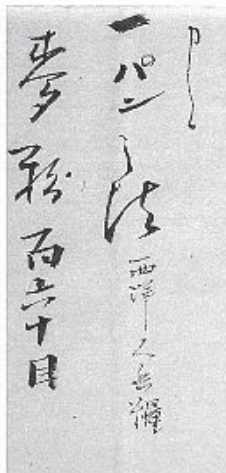
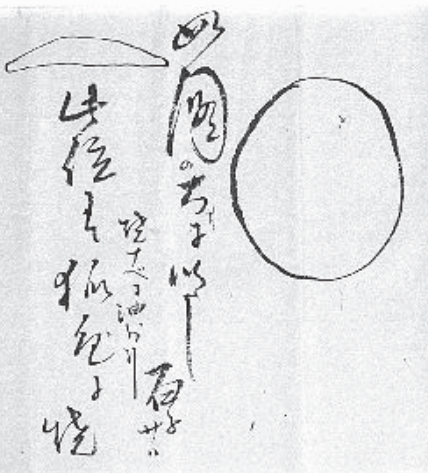
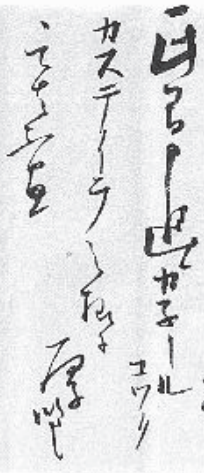
麦粉 百六十目
砂糖 四十目
玉子 五ツ

右の三味を水にてこね、焼なべにて焼く（以下略）

この製法で復元してみた。甘さがあまり感じられず、ばさばさとした感触は、長期保存に耐えられる工夫か、当時の貴重な砂糖の限度かわからないが、現代人の食べるカステラの甘みを減らし、水分を飛ばしたものと考

れた製法などを紹介しながら、松代藩を意識してか、「山人村方では」塩を入れたパンが手軽に作る事ができる方法であると、伝えている。

非山塾の指導者の位置にいた



川越藩土岩倉鉄三郎の記載した願書である「覚」には、御台場雛形のこと、浮御台場同断のことなどと並べて「パン製作の事」の照会がある。川越藩はサツマイモ、焼き芋が名産で、焼き芋を焼いた鉄鍋

と同等のパン焼き鍋といわれる鉄鍋が江川文庫に残されている。金

児忠兵衛宛て書状のレシピに書かれている焼き鍋とは、これではないかと思われる。

（江川文庫嘱託学芸員 橋本敬之）

英龍が残したパンの書状

江川家の至宝



重文資料が語る

近代日本の夜明け

34

的が置かれ、1丁ごとに杭を打って測定した。十七丁場は約1・85キの距離である。

1850(嘉永3)年10月4日に行われた五丁場、八丁場の15ドイムホーウィッスルの射程

表によると、立ち会ったのは肥田波門、岩倉鉄三郎、三浦佐太郎、宮内千之助、一瀬大蔵、服部峰次郎、柳沢石源太の7名である。五丁場撃ち8発を試している。

五丁場では、2貫(1貫約3・75キログラム)360目(刃の略約3・75寸)のガラナート玉(大きさ、重さにより呼び名が異なる)を5度半弱の角度で撃ったところ、4丁半のところで星(火薬)入着発、八丁場では1貫920目のガラナート玉を11度で撃って30間(約54メートル)で着発、12度で撃ったものは的を超えたが、成果を得られたと

大砲の試射資料は年記がみられないメモのよつなものも多い。しかし、実際にどれほどの距離を飛ぶのか何度も試射している。例えば、年不詳「覚」では、御鉄砲場より玉が落下した距離が3町53間、落下したところからの場まで3町35間(※1町約109尺、1間約1・8尺)と記載されている。これからすると、発射された大砲は7町28間(約814尺)の距離を飛ぶ必要があったと思われる。

稽古では、射程距離に応じて一丁(町)場、三丁場、五丁場、八丁場、十七丁場などの名で標

さまざまな条件で 大砲を試射、稽古

近隣や小田原、沼津で撃ち方適地探し

いうものではなかった。同年11月3日にも15ドイムホーウィッスルを試し、翌4日は3ポンドカノン砲を試している。また、同年5月21日は29ドイムモルチールで、小田原浜蔵下浜から山王原村海上5町沖へ、斜めに向け23丁撃ちを行った。この時は14〜17貫目のボム、7貫余のフラントを使用した。

年不詳稽古撃ち「玉数之覚」では、20ドイムモルチール1発玉目4貫580匁のものを、34度の角度で撃ち10町半に着弾している。15ドイムホーウィッスル玉目1貫660匁角

度9度で発射して8町5間に着弾、小型ホーウィッスル玉目880匁角13度では9町7間の着弾である。いづれも「十町場」としている。

身が長く射程距離も長い。弾道は低く目標物を直接狙う。ホーウィッスル砲は両者の中間に位置付けられ、目的に応じて使われる。砲身、射程距離、弾道とも両者の中間である。



英龍が描いた「大砲習練の図」

年不詳の資料であるが、「中村台馬の背測量致すべき事」が残されている。中村(伊豆の国市中、反射炉が築造された場所)字台の馬の背の測量を命じたもので、15間や20間(27〜36尺)では不足、3〜5町(324〜542尺)が必要としている。さらに南江間村(同市南江間)地内より北江間村地内へ向けて撃ち方をする場所奈古谷村(同市奈古谷)でも同様に撃ち方ができる場所を選定して測量するように指示を出している。

南江間、奈古谷とも韭山代官支配地ではないので、調査者の選定も同時に指定している。韭山代官役所近辺で試射できる適地を探し、遠くでは小田原や小諏訪村(沼津市)にも選定したことが判明した。(江川文庫嘱託学芸員 橋本敬之)

江川家の至宝



重文資料が語る

近代日本の夜明け

35

句では「立花華道の型」は真緑の松を真つすぐ立て、梅とスイセンを使うがあとは有り合わせで飾る」、5月5日端午の節句では「小竹を2本飾り、柏を添え菖蒲を使い、その他有り合わせで飾る」とある。食事の献立なども豪華で、文化を大切にす

1690(元禄3)年には歌人・飛鳥井雅豊から「元禄三年四月六日 蹴鞠為門弟 江川太郎左衛門殿」として、英暉に免許状が下された。「倭漢田鳥集(江戸中期の漢詩、和歌、俳諧集)」によると、英暉、その子・英勝父子は俳人大淀三千風に師事して、有名な江戸吉原の遊女「こむらさき」「あげまき」「小源太」と俳句を作っている。

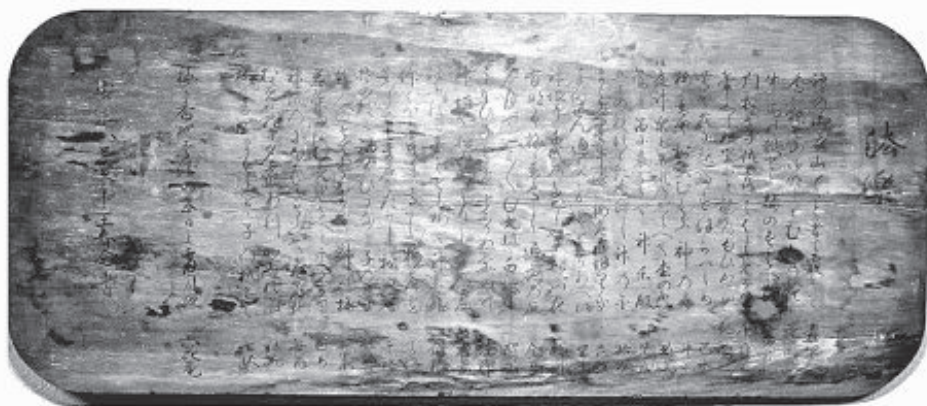
1706(宝永3)年に記録された「江川家年中行事」の中の、1月7日における人日の節

次郎(35代英毅)「竹馬の鞭と

も梅のすはへかな」と詠んでいる。金次郎はこの時9歳であった。

俳句好んだ英征 「蛭が島連」立ち上げ

伊豆、駿東で活躍した六花庵官鼠に師事



江川家主屋に展示したことがある1779(安永8)年の俳額

官鼠は、本名大村定八といい、

江戸生まれであったが、父は三津村(沼津市)出身である。雪中庵・蓼太・六花庵乙児の門弟で、蓼太の門人松木乙

児が富士郡吉原宿に62(宝暦12)年ごろ六花庵を開き、時雨窓とともに駿河の雪門(芭蕉の門下の服部風雪は雪中庵を称し、その門流は雪門と呼ばれた)拡大に尽力した。

官鼠は2世六花庵として沼津の長谷寺近くに居を構え、駿東、伊豆地域を活動の場として、18世紀最後の30年間にわたり地方俳壇に君臨した。駿府の清水寺、三島の蓮馨寺、沼津の釈迦堂に芭蕉句碑を建立し、1

803(享和3)年71歳で没した。菩提寺は三津の林鐘寺だが、沼津の東方寺に辞世の句を刻んだ墓石がある。また、東方寺には官鼠の肖像画が残る。

官鼠本人の何年か分の歳旦帳が残されている。歳旦帳とは宗匠が、新年祝賀の句を前年に門弟たちから集めて印刷したものである。1781(安永10)年『春興蝶』90(寛政2)年『日草』77(安永6)年『丁酉帖』85(天明5)年『春興蝶』86(同6)年『春興蝶』88(同8)年『春興蝶』89(同9)年『日暮』などを見ることのできる。

官鼠らは90(寛政2)年に伊豆市堀切の益山寺に俳額を奉納。97(同9)年7月には同市吉奈の善名寺の俳額選者を務める。77(安永6)年『丁酉帖』には伊豆の俳人176人、85(天明5)年刊『春興蝶』には伊豆の俳人75人の句が掲載されている。

(江川文庫嘱託学芸員 橋本敬之)

江川家の 至宝



重文資料が語る

近代日本の夜明け

36

ハエをまじまじと見て絵にする人が、昆虫学者を除けばどれほどいるだろうか。英龍の絵はハエを実物大で観察してたためた、まさに観察画である。ホタルは羽を広げて裏返し、裏返しした状態で羽を広げ、右横から左横から観察して、21通りを描いた。蜂、クモなどは特別な思いがないと描けないと思われるが、昆虫もあらゆるものを描いている。ゲンゴロウ、ミズスマシなどの水中生物にも及んでいる。

トンボ、チョウは特別観察し

て描いている。しかし捕獲して描くので、既に死んだ状態のものである。それを忠実に表現するので、足の様子から死んでいるのが分かる。チョウのうちクロアゲハを描いたものには彩色をしているが不満と見えて「この色朱、墨色、赤がかっている」「足六本とあり、横から観察、羽を広げて上から観察している。セセリチョウの腹部は「雲母」とあり、タテハチョウの羽のりんぷんは表現できないので「コケ（苔）金」を使ったようだ。当然死んだ4本足である。アオスジアゲハには「青とこころによって群青、黄土色、金色、あるいは白黒」と観察している。コオロギには表面を指して「この上すべて朱、黄、墨色」という注記がある。とりわけ注記を多くしているのは昆虫である。シ

ヨウリヨウバツタは腹部が羽で隠れているので、腹部だけ特筆して描いている。

あらゆる角度から 英龍の細密な観察画

捕獲した昆虫や鳥、八丈視察にも画材



細密に描かれた昆虫図

鶴はすね足だけしつこく描いている。足を広げたところ、前から、後から、横から何度も描いている。タカの羽を何度も繰り返し描いている。広げた状態、1枚1枚の羽、風切り羽などの部位もそれぞれ等大に描く。羽を下敷にしてその上からなぞったものもある。英龍の描く絵は評判で、いつでもどこでも描く習慣になっていた。

鳥も昆虫同様死んだ状態で持ち込まれ、それを描いている。鳥の羽ばたきも描くが、すべて観察をもとにそれぞれの部位から全体を見渡したものであった。ワシ、タカなどの完成画もあり、これらは掛幅装となって江川文庫に保管されている。また、植物や岩などと構成要素の一つとして鳥を多く描いている。これらは、それぞれを観察した結果を描いたものである。

絵を描いている姿がいつも手代たちにも映っていた。手代の柴鳥助はハトを撃って英龍に届けた。それを描く。日本にはない南方の鳥も描いている。おそらく英龍の評判を聞いて土産に持参したのではなからうか。八丈島へ視察命令が下されたときは、画材を携行し船内でも八丈でも描いた。「八丈島の鳥」として描いたものが残る。併せて同時期に描いたと思われる、魚おけを頭に載せて運ぶ女性を活写したものも残る。

之

（江川文庫嘱託学芸員 橋本敬

江川家の至宝



重文資料が語る

近代日本の夜明け

37

だけである。あとは、巻紙に図鑑のように次々と並べて描いている。植物は身近にあり、それらを手当たり次第と書いてよいほど描いた。

昆虫も同様である。鳥は捕まえたものが持ち込まれ、それを描くことができた。魚はそうはいかない。確かに漁獲したものを描いたであろうものもある。

しかし、水中に生息する姿を描いたものは、いつ、どこへ出かけて描いたのであろうか。海岸視察のおり、水中を覗いていたのでは仕事にならないが、そうして描いたとしか思えないほどたくさん描いている。生態が分かる魚は近海、岩場に生息するものが多いのは事実である。

動物は完成画が多い。そのため、掛幅装にして江川文庫では保管している。例えば、十二支

英龍は貝も南方産のものを非常に細密に彩色して描いている。どれも、図鑑の絵のようであり実物大である。また、注記も入れているのは、どの絵にも共通している。魚も同様である。カマスの絵は、うろこが光っている様子を雲母で表現している。

作品として描いているわけではないので、一枚の絵に完成させよつとは思っていない。観察の様子を絵に表現しているのである。

魚の絵を完成させ、掛幅装にしたものは、コイを描いたもの

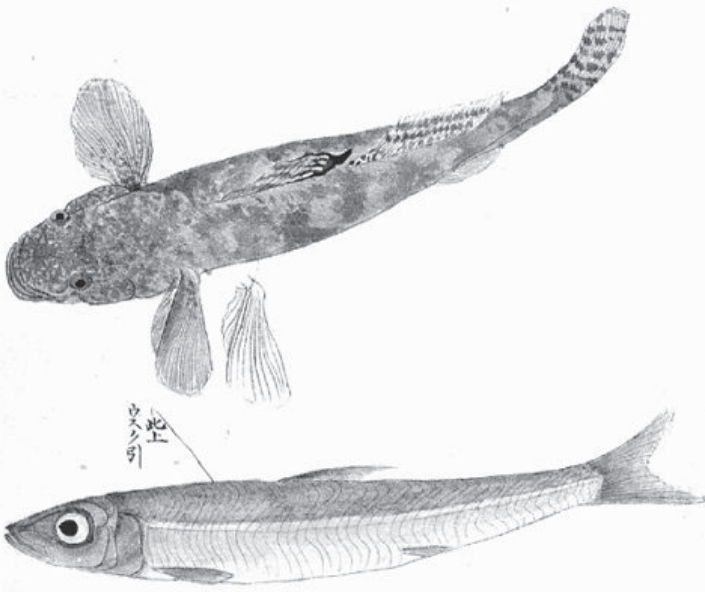
で言えば、羊は残念ながら描くことがなかったが、他の動物はどのような状態にしろ、全て描いている。とりわけ英龍の名前から「龍」の絵を執着して描

いている。動物で一番得意としたところは架空のものではあるが龍と思われる。自分の名前を気に入っていたものとも考えられるが、多くの龍が描かれた。紙の端切れにまでいろいろな表現の龍を描いている。蛇そのものは描いてはいないが、蛇のしっぽをお

っかなびっくり持っている子どもを描いたものがある。「天城山狩猟図」は完成作品として掛幅装になっている。犬が鹿を追い出し、使わなくなった炭焼き窯のところで銃を構え、遠くではやはり勢子と犬に追われた猪を、銃を構えて待っている様子が描かれている。さ

名にちなむ？ 「龍」が得意な英龍

周辺の様子も描く「天城山狩猟図」



図鑑のように活写された魚類

らに遠くにも2人が銃を構え獲物を狙っている。狩猟の様子はかりではなく、炭焼き用の伐採して積み上げた樹木、刈った干しカヤなど、当時の天城山中の様子まで情報があふれている。特徴が分ればそれ以上描かない図巻類の動物や魚、植物などの絵と違って完成品としてきちり仕上げている。猪など獲物は持ち帰らず、勢子に渡して葎山へ帰ったというが、猪の皮を開いて敷物に利用したものと想像、それを実物大で表現している。

1845（弘化2）年の狩猟の結果を示した史料が残っている。これによると、英龍が一番成果を挙げ、猪、鹿合わせて20頭を撃った。塾生、手代の記録をみると同年正月、江川家内の八幡神社に奉納した角打ち（弓矢や鉄砲で的を射ること）の結果と同じで面白い。この狩猟の様子を絵に仕上げたものが、天城山狩猟図であろう。

（江川文庫嘱託学芸員 橋本敬之）

江川家の至宝



重文資料が語る

近代日本の夜明け

38

英龍在職中の38(天保9)年、郡内騒動後の甲斐国都留郡支配を命ぜられる。都留郡は支配が難しい地域で、家臣の斎藤弥九郎と刀剣の行商を装い視察を行った。その結果、郡内は安定し、

英龍は1801(享和元)年5月13日、父・江川英毅と母・久の次男として生まれた。生誕日を前に英龍のことをあらためておさらいしたい。

邦次郎(秀次郎)を通称し、長兄英虎の死により36世嫡子となり、34(天保5)年35歳で代官に就任した。坦庵と号したため、現在尊称を「坦庵公」という。

坦庵が生きた時代は幕末期で、日本が諸外国から開国を迫られ、彼は進取の気概を持って、代官として領地の支配だけでなく国の将来に向かっての仕事をたくさん手掛けた。

喜んだ農民は初午の節句に「世直江川大明神」の幟を立てた。

53(嘉永6)年ペリーに代表される開国要求に対する沿岸警備や治安維持のために、弊風改善、海防策、農兵制度の提案をした。坦庵没後、英武の時代、葦山、三島をはじめ各地に訓練場を設置した。また同年、品川沖の海上砲台(台場)建設に取り掛かり、大砲鑄造のため反射炉建設の命令を受けた。反射炉は坦庵没後、57(安政4)年11月完成となった。

54(嘉永7)安政元)年、開国交渉で下田を訪れたロシアの

プチャーチン提督のディアナ号は、11月4日に発生した大地震により座礁、修理のために戸田へ回航中、嵐のため沈没。坦庵は勘定奉行川路聖謨らの依頼

国の将来担い 幕末を駆けた英龍

「ヘダ号」建造中に53歳で病没

で、日本で初めての洋式帆船建造の指揮をとり、坦庵没後に完成した船は「ヘダ号」と名付けられた。

進歩的な考えを持ち、その他、50(嘉永3)年、肥田春安に命じて、天然痘の予防のためまず自分の子どもに試したあと、北江間の少年に種痘を実施、外国との戦いに備え、兵糧食としてのパンを日本で初めて焼く。また、射撃に便利な葦山等を考案し、大流行した。

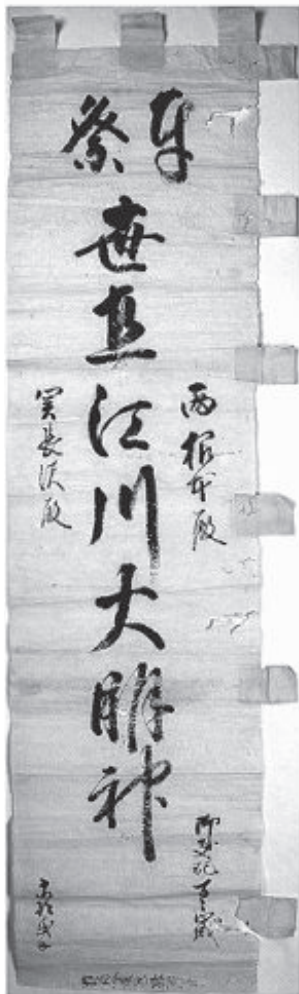
坦庵は質素倹約を旨とし、食事は一汁一菜、娘卓には菓子箱を利用した硯箱を与える。しかし、必要なことには大金を投じ、英国軍艦マリナー号の艦長との

交渉に当たった際「蜀江の錦」(小袴・龍鳳凰文錦)の袴を着け、交渉の末退去させた。私たちが現在使っている「気を付け」「前へならえ」などの号令も坦庵が考案したものである。

また、坦庵は隣国の清がアヘン戦争で敗れたことに危機感を持ち、西洋砲術採用を提案した高島秋帆を支援した。実際に奉行された徳丸原(現在の東京都高島平団地)演練の結果、幕府はこれを採用する方針だったが、あくまで反対の目付・鳥居耀蔵は秋帆に謀反の疑いをかけ逮捕、結局実現しなかった。その後、老中水野忠邦の失脚などもあり、坦庵は不遇の時代を、

葦山塾で門人の教育、研究、兵書の翻訳などで過ごした。

ペリー、プチャーチンの来航と幕政もまた多忙の最中、露艦建造の公務を帯びて伊豆戸田港にあって勘定奉行兼外国奉行の恩命に接し、厳寒、病苦を押して出府したが病状が悪化し、55(安政2)年1月16日、満53歳で死去、本立寺(伊豆の国市金谷)に葬られる。阿部正弘の弔歌一首「空蟬は限りこそあれ真心にたてし勲は世々に朽ちせじ」。院号は修功院英龍日淵居士、妻は越へ北条氏、く62(文久2)年、57歳没」という。(江川文庫嘱託学芸員 橋本敬之)



甲州の祭礼で掲げられた幟旗

江川家の至宝



重文資料が語る

近代日本の夜明け

39

げている。

英毅は20(文政3)年には、日出入昼夜時刻計算書、七推日出入昼夜時刻算法(日の出、日の入りから割り出した昼夜の計算書)を手に入れ、24(同7)年には月食日時を計算し、「測量考」という原稿を仕上

暦盤、子午線規など、天文に関する器物も多数残されている。これらには使用した、または購入した年号が記されていないが、先進的で高度な趣味を持つ英毅が使用したものと思われる。

日本古来の数学である和算にも長け、糸弦(コサイン)・三角関数等計算表なども残る。10(文化7)年には独自に「数学金谷編」を作成し、数学問題を英虎、英龍兄弟に出題させた。作問は英龍が1、3番、英虎が2、4番目を行っている。英毅は02(享和

1808(文化5)年閏6月23日付「高橋作左衛門景保(江戸後期の天文学者)書状」に先だつて差し上げた子午線儀(南北を計る器具・江川文庫に所蔵)の図面について、図解してある中で不明のところがあり、その部分を書き添えて記載してくださ

り、その通りと理解した」とあり、別に書き添え、さらに不審のことがあれば質問するようにと、記載して英毅に送っている。

残された書状はこれ一通であるが、内容から別紙があり、かなり詳しいやりとりが行われていたことがうかがわれる。

英毅は伊能忠敬 間宮林蔵と交流

天文、測量、数学に造詣

2年9月には神社に算額(自分の発見した数学の問題や解法を書いた絵馬)を奉納している。天文学から測量にも興味があり、伊能忠敬との交流もあった。江川文庫には伊能からの手

紙類は残っていないが、伊能記念館で入手した伊能に宛てた英毅の手紙がある。伊能が行った全10回の測量のうち、第2次測量は01(享和元)年4月2日に江戸を出立した調

査であるが、伊豆の海岸線のみで内陸部の測量はなかった。この年はちょうど英龍が生まれた年である。第9次測量は伊能が高齢のため参加せず、永井甚左衛門を隊長として15(文化12)年

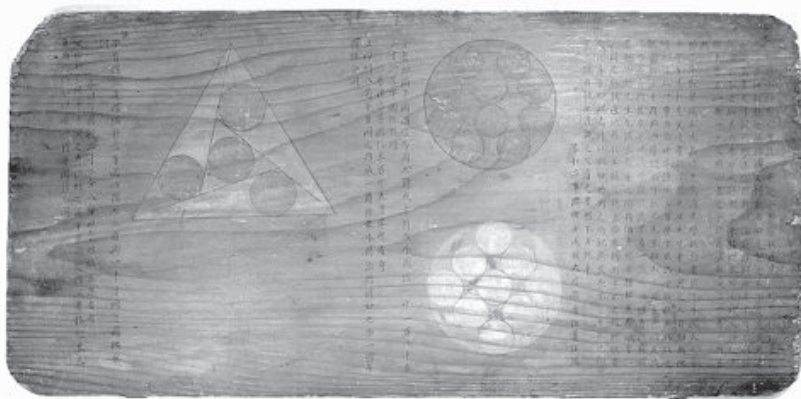
4月27日江戸を出立、三島から入り、5月2日は葦山泊で下田往還(街道)から江川邸までの十八丁道路を測量しながら、葦山代官役所を訪問している。

39(天保10)年、「蚕社の獄」で洋学者を弾圧した鳥居耀蔵との確執のなかで英龍は江戸湾の測量を行うが、その援助を、伊能に測量術を学んだ江戸後期の探検家・間宮林蔵がした。これは、英毅が天文方と交流をしていたつながりの中のことであった。

年である。

書状は「英龍から浦賀あたりの絵図面の入手を依頼され、すぐにお伺いして届けなければならぬ」ところ、作左衛門一件によって天文方が取り込み、そのため、下絵図ならびに野帳についてはこのほかごたごたし、作左衛門を引き継いだ天文方の山路弥左衛門のところへ行って探して来ない訳にはいかない」という内容である。英毅の付き合いの中から英龍が間宮林蔵に調査依頼を行うことができた

とみる事ができる。(江川文庫嘱託学芸員 橋本敬之)



英毅が神社に奉納した算額

が3通江川家には残っている。そのうち4月28日付では、間宮の国

嘱託学芸員 橋本敬之

江川家の至宝



重文資料が語る

近代日本の夜明け

40

すものと思われる。子である英龍と一緒に合奏してもおかしくない。

雅楽は口伝によつて伝承されるものである。

おそろく江川家でも、親から子へ、子から孫へと伝えていたに違いない。手紙

などの資料から、江戸で催された雅楽の演奏を聴きに行ったり、さらに英龍に送った手紙には絵画のことばかりでなく、管弦について記し、管弦は親子共通の趣味だったよつである。

弟・陽三郎の婿入り先の祖父・関川庄右衛門宛てに「誓の平曲」（原文）奉納を報告している。また、陽三郎宛てには「先

ごろは庄右衛門様が將軍から褒美をいただきおめでとつございます。また横笛の譜面をお借りしたいと存じ」旨を記し、父英征の時代から交流があった。

英毅は音楽をたしなんだ。年不詳8月5日から9月15日の三管合奏目録があり、家翁笙、坦庵笛、町田巨筆箏となつている。家翁は誰を指すのか不明であるが、英龍が笛を、手代の町田巨が筆箏を演奏した。

江川文庫には英毅が愛用した笙や筆箏、琴、太鼓といった楽器が保存されている。なかでも笙、筆箏、龍笛については、かなりの点数があり、英毅自作と思われる龍笛もある。また、楽器ごとの譜面も残されている。家翁との表現から英毅を指

音楽たしなむ英毅 英龍らと三管合奏も

進取の精神 面目躍如

管弦を行うので、謡も同様

に好きであった。江戸役所にいた英毅は、陽三郎の義父・関川庄五郎宛てに「今晚お暇がある

なら、謡本を持参して来てほしい、敦盛なごを一緒に謡いたい」と書状を出している。

英毅はさまざまなことに興味を持っていて、これが英龍にも引き継がれていったのである

が、関川家の依頼による経箱（経文を入れておく箱）をわざわぎ蝦夷（北海道）の奇木「ヲンコ（イチイ）の木」を取り寄せ、大工に製作させている。また、蔵書印をはじめ銅印、石印をいろいろ作った。

英毅が使っていた尺八(右)と筆箏



英毅の妻・久はカステラを焼く趣味があったよつで、陽三郎が久に宛て、詳しいカステラの作り方を教えてもらった札状を送っている。当時、英龍は母のカステラを食べていた。そして「カネールコックカステラ」のような厚さではない」というパンを作りレシピを残し、「パン祖」と呼ばれるようになる。さらに年代は不詳であるが「コーヒイ豆をイリ候もの」と記された絵が残され、当時、コーヒイも飲んでいたことが分かる。絵は英龍が描いたと思われるが、いつ飲用していたかは不明である。

あらゆる面で進取の精神が見られる。（江川文庫嘱託学芸員 橋本敬之）

江川家の至宝



重文資料が語る

近代日本の夜明け

42

円の資本として伊豆生産会社を興すこととした。この生産会社には足柄県令になる英龍の元手代柏木忠俊が中心的に参画している。

26 (文政9)

年阿波の商人・鹿島屋甚太郎は、沼津に出店

し、ここを拠点に江戸までの一円で藍、米穀販売、金融業を展開していた。沼津から江戸へ向かう途中、風待ちで下田港を利用するわけであるが、下田での風待ちが多くなると、下田町の畀米(備蓄米)が払底してしまふことに危惧を抱き、葦山代官に寄付を申し出た。

「下田町は私(鹿島屋)の先祖が沼津駅への出店に際して最初に商売を行った土地である。そこで、風待ち用で使われる米が少くないのは嘆かわしく、かつ、支配所へ用立て金を差し出した

江川氏は地方名主と強い絆、信頼関係を築いていた。このことを示す具体的に記載したものはないが、時代が下って1873 (明治6)年の仁田村(函南町)役場「御布告向御用留村内受印帳」(仁田家文書)によると、69 (同2)年から村の取り決めに従って葦山県に年利1割で毎年100両ずつ預け、73 (同6)年には元金400円(当時1両を1円に換算)と利息95円となっていた。

これを仁田小三郎が受け取って、さらに5円を加え、500

有力商人の資金で村々の困窮救う

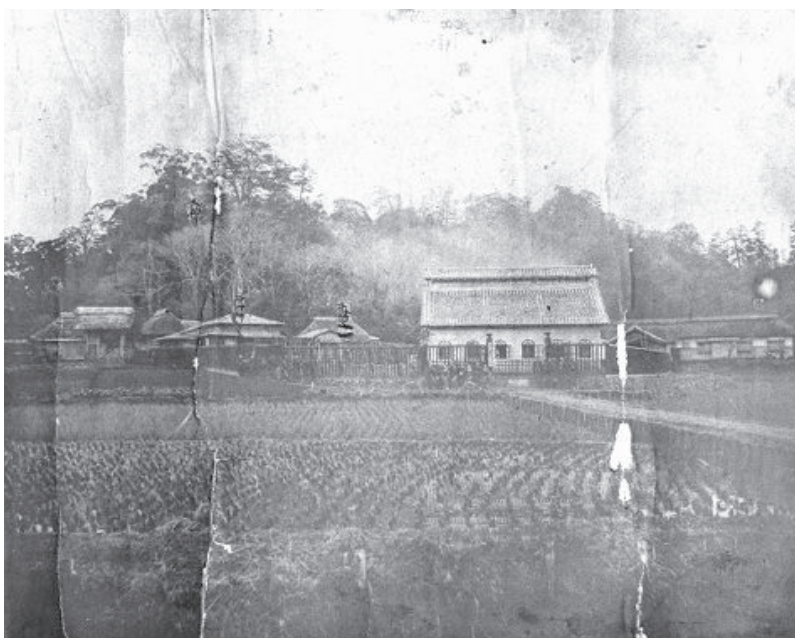
地方名主と築いた強い絆

時にもお褒めの言葉をいただいた。このお礼として少しでも御役に立ちたいと身上手薄ながら米500俵を上納し、下田近辺での異国船などの緊急時に備え

た江川家の御用米、畀米として使ってほしい。さらに風待ちを含み船間の時にもいつでも土蔵内に米1500俵ほどを囲い積み置き不足しないよう畀米として使ってほしい」と願い出た。

この時の代官は英龍の父英毅の時代であるが、鹿島屋に米の寄付の申し出をさせたのである。これより以前の19 (文政2)年には箱根宿三島町助成金を鹿島屋金で調達して貸し渡した。

英龍の時代になっても関係が続き、41 (天保12)年、三島宿拝借金350両を紀州様貸付金のうちから鹿島屋を通じて借りている。



伊豆生産会社が手掛けた葦山製糸場

61 (文久元)年甲州境村の有力名主・天野伴蔵は、葦山代官に低利貸付の資金供与を申し出た。資料が欠けているため金額は不明だが、年利6分というものであった。同年、この資金を融通して中村(伊豆の国市)へ同利息をもって10年賦(分割返済)貸し渡しを行った。葦山金と同時に、天野伴蔵に返却すべき金高を記した年貢皆済状も散見する。

困窮した村へ葦山代官を通じて低利で貸し付け、その返却を記したものであろう。当時、公金の金利は1割2分以上、一般の貸し付けにおいては高い場合は2割でも普通の時代、非常に低利であった。(江川文庫嘱託 学芸員 橋本敬之)

江川家の至宝



重文資料が語る

近代日本の夜明け

41

鵜飼いで有名な長良川では徳川家康が、15(元和)年から御船御用を仰せ付けたい、役船の数は厳密に決められていたが、狩野川の鮎鮎の史料は現段階では他に未発見で、実態はつかめない。

1677(延宝5)年に三島代官伊奈忠公が、支配のための覚書として編集した『伊豆鏡』によると、三島から江戸への上納物に着(さかな)、鮎鮎があった。鮎鮎は狩野川で漁獲した鮎を使って納入した。

このため宗光寺組6力村、小立野組7力村、牧之郷組14力村で分担納入していた。この3組は1カ月に3度ずつ飛脚を使って江戸へ納め、その飛脚賃は口伊豆(伊豆北部)7組(三島、谷田、田中、狩野、大見、内浦、葦山領)の負担であった。

98(元禄11)年、伊豆の村々の多くは旗本知行(領地)になるが、神益中島村(伊豆の国市神島もそうであった)その「神益中島村差出帳」は、新しい知行旗本に提出した村の様子を書き上げたものである。「鮎運上(租税の一種)のことは、夏川は5月より8月まで1カ月に1度ずつ鮎数38ずつ差上げる、秋川では梁などという、川をせき止めて鮎を捕る。これも浮役(租税の一種)として納める。度々出水する場合には訴え願いを出して半役(負担の半減)になる

狩野川の鮎漁獲 幕府、旗本に上納

英毅、全国先駆け友釣り許可

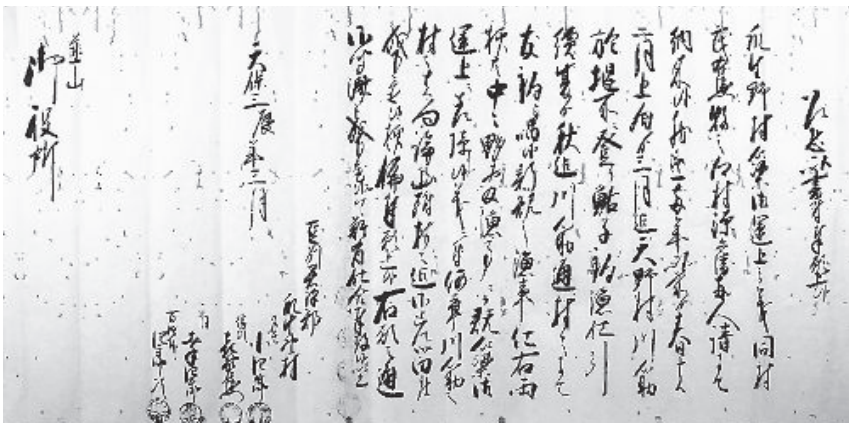
こともある」と記される。旗本知行に代わったため、それまでの幕領時の鮎年貢の在り方を報告したものである。翌99(同12)年の年貢割付状には金

2分、「夏川・秋川共 鮎200匹差し上げ」とある。1838(天保9)年村明細帳では、鮎運上について夏川は5月から8月まで鮎50本、8月には梁懸

けでさらに50本を加えた100本ずつを領主の3旗本それぞれに差し出し、合計300本となつた(神島旧名主家文書)。神益村では鮎をよく捕っていたようで、1669(寛文9)年4月9日、小坂村(伊豆の国市)の名主宅新築完成の家見の祝儀帳の中に、神益村武左衛門が生鮎15本を持参した記載がある(小坂・大川家文書)。

落ち鮎の梁懸け場となっていたが、狩野川では鵜飼いで鮎漁が行われていた。堀之上(伊豆の国市)子神社の神官であった小川信邦が書いた詳細な「年表(加殿小川家文書)に、1832(天保3)年頃鮎の友釣りが始まったと書かれている。友釣りが始まると、関係村々は葦山代官・江川英毅にその許可を求めた。その結果、葦山役所から、天野堰所では2、3月の上り鮎については釣り漁、夏から秋にかけて友釣りを新規漁法として許可する触れが出された。

1832年に鮎の友釣りの禁止を求める訴状



1749(延享4)年分旗本中野氏領神益中島村「年貢勘定目録」に焼き鮎金1分が計上されている(神島旧名主家文書)。

狩野川では伊豆の国市白山堂の地先、江間堰の締め切られた場所、鮎の友釣りが行われた。この付近は(江川文庫嘱託学芸員 橋本敬之)

これに対して瓜生野、牧之郷から梁運上に支障が出るという訴えがあった(江川文庫)が、領主・地頭に真加(使用料、租税)を納め、その差し引いた残りを許可するという形で決着がついた。これが友釣りの始まりである。発祥は京都八瀬川が早いというが、史料的な裏付けは狩野川の方が確かである。

江川家の至宝



重文資料が語る

近代日本の夜明け

43

1801(享和元)年5月13日、英龍は35代英毅の次男として誕生した。幼名は芳次郎、邦次郎といった。11(文化8)年11月1日「英龍」を名乗り、元服を行った。数えて11歳、満10歳であった。この名乗りの時、将来を占うために使われる文字である「鬮納」は「鬮」とした。「鬮」は「やわらぐ」という意味である。実名、鬮納とも父英毅が考定した。

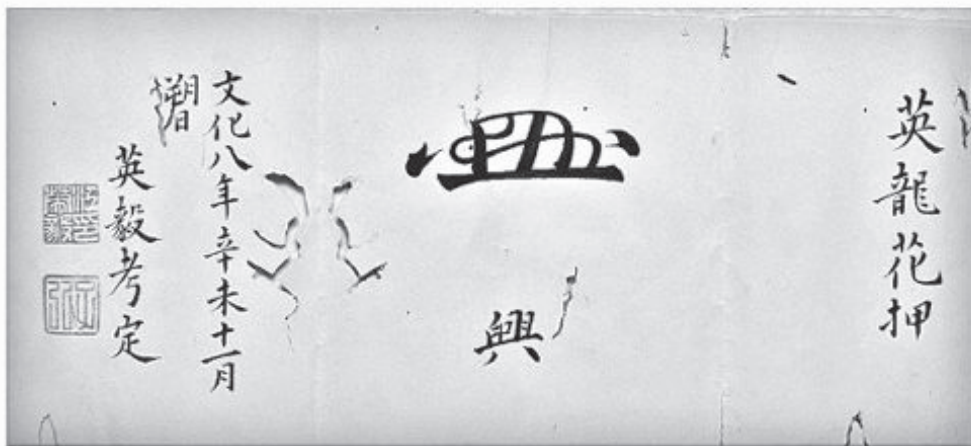
名乗りの時の名前が芳次郎で、のち代官に就任するまで邦次郎を名乗っていた。史料にどちらの名前があった場合、どちらが幼少の時のことなのか判断する材料になる。4歳年上の兄英虎は幼名を倉次郎といった。名乗りは14歳で、兄弟一緒に11年である。鬮納は「鬮」であつた。「鬮」は「つつみ」と訓じ、小さな防塁、小城を意味する。天文学から易学まで興味を広がった英毅は、江戸役所の建て替えについても易により新建材を使って建築したほどである。名乗りについては「摩光韻鏡」(中国の音韻=漢字の音の構成=凶の研究書、1787=天明7=年刊、江川文庫蔵)を使って吉凶を考えていたことがわかる。英毅の名は『豆州志稿』を編さんした秋山富南が考定した。それはまさに87年で、富南によってこの書物がもたらされた可能性もある。

性もある。英毅の鬮納は「衣」である。八卦の跡などがあり、多くの吉

命名から建材まで 英毅の興味、易学にも

英龍の気質見抜き花押は「興」

父英毅が英龍に渡した花押



凶を占っていた。英毅は弟・陽三郎の名乗りを91(寛政3)年

12月3日に行った。代々「英」をつけているので、弟の場合

「義」の文字を漢文の「左伝隠公三年云教之以義方云々」(原文)からとり「英義」としたとある。ちなみに鬮納は「倚」である。

英龍の名乗りの日、花押(署名の代わりに使用される記号、符号)も考定した。英龍は「興」の文字からデザイン化したもの、英虎は「嘯」の文字から興したものである。「嘯」は訓読みでは「うそむぐ」で、猛

獣などがほえることを意味した。「虎」のように居丈高になつて欲しいと願つてつけたのである。号は「嘯風」といった。残念なことに長男倉次郎は代官見習いになるが、25歳の若さで脚の病いにより「く」なつてしまひ、次男の英龍が36世、代官に就任することになる。

おそろく次男である英龍は何にでも興味を示し、父として頼もしく思っていたのではなからうか。そんな表れが花押にみえる。実際、英龍はさまざまな事に関心抱き、次々と実現していった。

「興」の字は「おこす」である。興味を持ったばかりではなく、実際にいろいろな事業を手がけたことは周知のことである。その大きな活動源となつていた。父はそれを見抜いていたに違いない。また、母は何にでも興味を示す血気盛んな英龍を諫めるため「忍」の字を贈つたものと思われる。

(江川文庫嘱託学芸員 橋本敬之)

江川家の至宝



重文資料が語る

近代日本の夜明け

44

を確かめようとした。

同年11月22日の阿部正弘し渡しに「御普請役格中浜万次郎儀江川手付として蒸気船製造方として取り扱わせ申すべし、但し取締方嚴重に致すべき」と、あった。すべ

ま25日、中浜万次郎引き渡しのため同道した。

結局、これからはオランダ語の時代ではなく英語の時代がやってくる、英語の語学力が役に立つはずだということで、手付に採用した。手付は、手当が幕府から支給される国会議員の公設秘書のようなもので、高島秋帆が葦山代官海防付手付となった時、同じく海防付手付普請役格と迎え入れられる。江川江戸役所が芝新銭座に移転し大小砲習練場ができてからは、その教示方として働き幕末に至る。

1853（嘉永6）年6月のペリーの浦賀来航によって、英龍の活躍の場があらためてやってきた。43（天保14）年、水野忠邦失脚以来鉄砲方の職を解任されていた。ペリー来航によって、老中阿部正弘は英龍を勘定吟味役格海防掛に任命した。9月、ジョン万次郎（中浜万次郎）が松平河内守・川路聖謨役宅へ呼び出された時、英龍も同席していた。そして面談の後、蘭学、算術などの心得のある英龍の家来を差出し、2度でも3度でも面会したいと訴えて、力量

60（万延元）年、咸臨丸が米国へ向けて就航したとき、通訳として乗り込んだジョン万次郎

は米国で写真キットを購入し、日本へ持ち帰って多くの人物を撮影した。その撮影されたうちの1人に英龍の子息で37代当主江川英敏がいる。初めて撮影したのは旗本小沢太左衛門という人物であった。この撮影が、日本人が写した最古の写真になるという。

英龍は、自分の企画、今後に役立つと思われる人物を積極的に採用した。ジョン万次郎は、米国の思想をもたらす危険人物と見なされていたにもかかわらず、その見識、語学力が英龍には必要であった。

齋藤弥九郎は、道場における自分の兄弟子であるにもかかわらず、英龍の手代として片腕として働くようになる。江川文庫に残された書状の宛先をみると、幕閣関係の書状、通達は当然英龍に直接宛てたものだが、それ以外の報告の類は齋藤弥九郎に宛てたものが多い。弥九郎が秘書として働き、同人を通して英龍に報告がなされていた。

見識、語学力見込み ジョン万次郎抜てき

英龍、有能な人材 積極採用



ジョン万次郎の撮影による37代江川英敏肖像

手代の採用は柏木家、柴家、長沢家、飯田家のように代々江川家に仕えていた家も大切に、さらに弥九郎や矢田部郷雲などのように必要な人物を抜てきすることもあった。小駒胤長は刀鍛冶であった。英龍が考えた鉄砲鍛冶として必要と考え、勝手方手代として採用した。

（江川文庫嘱託書員 橋本敬之）

江川家の至宝



重文資料が語る

近代日本の夜明け

45

英龍の父は英毅、母は久とい
った。1792（寛政4）年、
父英征の死去に伴い、英毅が江
川家35代を世襲し代官を継い
だ。英毅は幼名を金次郎といひ、
87（天明7）年元服して英毅を
名乗った。

年輩山代官英毅に願ひ出て幕府
の許可を得て、伊豆各地の村々
に対し統一した質問事項に答え
る形で雛形を渡し、それを書き
上げた「村明細帳」と村絵図を
富南へ提出させた。
現在、各地に村の様子を書き
上げた「村明細帳」の控え、村
絵図が残されている。編さんの
項目が統一されたことにより、
より上質の編さん志が完成し
た。また、地域に残された「村
差出帳」や村絵図から当時の村
々の様子を私たちは知ることが
でき、大変貴重な史料となつて

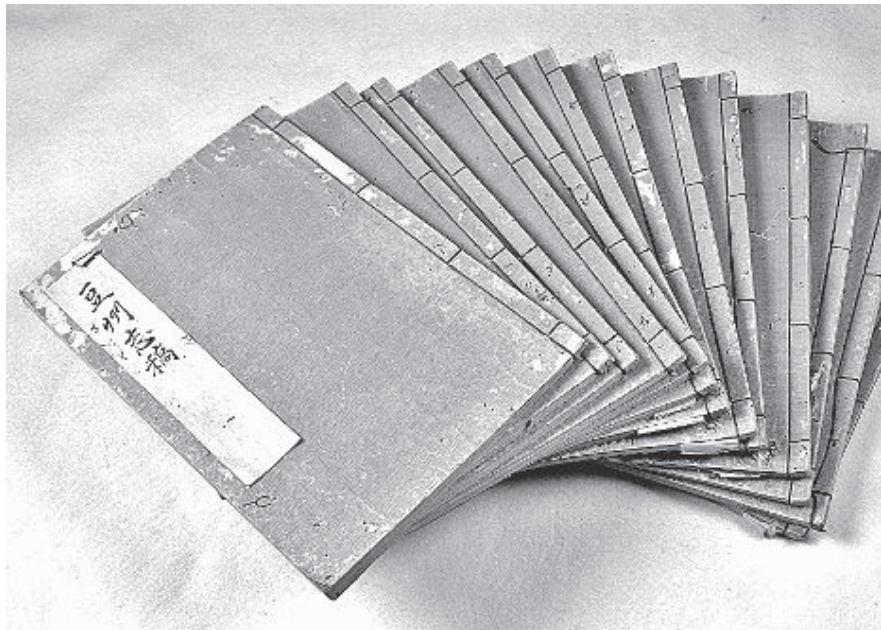
ていたので、こ
こへ入門した。
富南は180
0（寛政12）年
完成の『豆州志
稿』全13巻を編
さんしたことが
著名である。こ
の『豆州志稿』
の編さんでは、
はじめは自ら探
査を行ったが、

1794（同6）

いる。『豆州志稿』は江川家を
通じて幕府に納められた。

富南、村々の詳細記す 『豆州志稿』編さん

安久村の豪農、江川家とも深い交流



安久村（三島）の豪農・秋山富南が編さんした「豆州志稿」

さて、『豆州志稿』の「豆州」
の読みであるが、これは「とう
しゅう」と読んだ。『寛永諸家
系図伝』という江戸時代初めに
編さんした御家人の系図集に江
川家が掲載され、そのなかに「
うしゅう」とふりがなが記され
ていること、また、江川文庫に
残されている史料中でも「とう
しゅう」とふりがながあるもの

がある。現在、私たちの多くは
「ずしゅう」と読んでいるが、
本来は「とうしゅう」と読んで
いたはずである。

富南は、この編さん事業を通
じて、由緒ある場所の同定を行
った。その一つである源頼朝が
流されたとされる「蛭島」の位
置については、蛭島の地名にな
っている江川家の土地に記念碑
を建立した。これは現在も残っ
ている。

英毅の名付け親となるほどで
あったので、父英征の時代から
深い交流があったことが認めら
れる。英征は1792（寛政4）
年に亡くなったが、同年、富南
は江川家に泊まりにきている。
いかに、江川家と地域豪農と
の結びつきが大きかったかを
知ることができる。

江川家は熊坂村（伊豆市）在
住の国学者である竹村茂雄とも
交流し、地域の中にいる学者と
の交流や、名主層とも深いつな
がりを持っていた。

（江川文庫嘱託学芸員 橋本敬
之）

江川家の至宝



重文資料が語る

近代日本の夜明け

46

1853（嘉永6）年6月のペリー来航によって、老中阿部正弘は英龍を勘定吟味役格海防掛に任命した。43（天保14）年の水野忠邦の老中失脚とともに鉄砲方を解任された英龍に再び活躍の場が訪れ、江戸湾防衛のための海岸巡見、内海台場の築造、反射炉建設などの施策を建議し、また実行していった。

51（嘉永4）年に作成した意見書は、下田警衛のための軍艦建造、下田近辺3万石の上知（没収）、農兵取立などについて記述している。

これらの動きはすぐには実現しなかった。代官就任とともに情報収集を始めて、既に国防の考えを温めていた。「天保七年和蘭人地球中ノ風聞申上候書付」は、36（天保7）年に出されたオランダ風説書の写しである。これを入手した時期は不明であるが、欧米の情報も少しも得ようとしていた。

西洋砲術、農兵組織 廻船利用など建議 老中阿部正弘、英龍を海防掛に任命

込まれている。このような報告が幕府に届けられたのである。世界情報は1年に1回届けられ

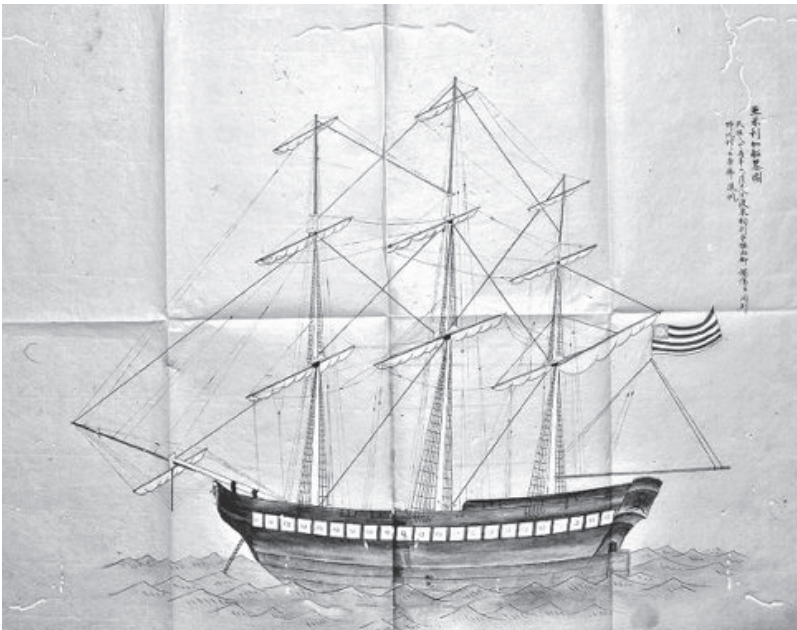
のみである。しかし、世界情勢を知る大事なものであった。英龍も翌37（天保8）年にも海防建議を起こしていることから、少しの情報でも得たいと考えていたものと思われる。

同年「伊豆国御備場の儀につき存じ付き申し上げ候書付」を幕府勘定所へ建議した。内容は、以下のようなものである。

「伊豆半島は南が太平洋に突き出し、3方向が海に面している。西は駿州、東北は房州を望む。伊豆は山峡僻遠の地ではあるが、海に面していることから江戸へ海上半日、大坂へは1日で到達することができる。廻船は下田へ停泊するものが多く、江戸に対して咽喉の位置にある。この場所に異国から不意に多くの軍艦を乗り付けても防衛することができず、簡単に上陸を許すことになってしまう。日本の船は千石船のような大船の軍艦を造っても日常乗り回すことができれば備えには間に合わない。日ごろ廻船として利用すれば役立てることができ

る。また、御備場を仕立て江戸湾の入り口で防戦できる要路に築き、大筒台を備えるものである」とする。

農兵の組織、鉄砲の改良などに及び、さらに、それぞれに具体的な方法を記して建議した。相互に有効な働きをして海防が成り立つという論を展開している。すなわち、西洋砲術を取り入れ、それに対応した軍制を整えることが、海防の核心をなすものであった。（江川文庫嘱託 学芸員 橋本敬之）



海防論のきっかけになったモリソン号の図（江川文庫蔵）

江川家の至宝



重文資料が語る

近代日本の夜明け

47

葦山塾は高島流砲術の伝授が目的だったので、塾法にもあるように実践の場が設けられた。

1845(弘化2)年正月2日に行われた江川邸内にある八幡神社への角打ち(弓矢や鉄砲での射撃)奉納額が残されている。それによると、松代藩・

金児忠兵衛、佐野藩・関隆蔵、壬生藩・友平栄、上田藩・加藤助次郎、佐倉藩・馬場廉、長久治郎、松前藩・竹田作郎、手代として山田山蔵、長沢鋼吉、清水吟之助、森田貞吉、望月大象、市川来吉、松岡弘吉、岩嶋千吉、安井萬蔵、矢田部郷雲が参加している。

も英龍が最高で、次いで森田貞

いる。イノシシ1、鹿9頭を撃った安左衛門が最高で、手代森田貞吉はイノシシ3、鹿5の合計8頭、長沢鋼吉はイノシシ1、鹿6の計7頭、蘭語翻訳の矢田部郷雲がイノシシ1、鹿3の計4頭であった。

参考までにのち江戸大小砲習練所教授となった友平栄は両方を1頭ずつ射止め、川越藩士の岩倉鉄三郎は鹿を1頭射止めている。何も收穫のない者も多数あるなかで、英龍はイノシシ5、鹿15の計20頭の成果であった。

また、この年1年間にわたり行われた山猟も実践の場であった。毎回全員が参加できた訳ではない。その成果を素直に読み取って良いか分からないが、その中でイノシシ、鹿を射止めた数が記されている。

英龍 葦山塾で角打ち、山猟を実践

天城山中の携行食はパンのみ

吉、長沢鋼吉である。ちなみに剣の達人・斎藤弥九郎も参加しているが、1年間で射止めた成果はなかった。この時期、幕府から離れ多くの門人を教育する

ことで、いつか日本のために役立つ人材が育つという信念が、英龍の主催する山猟にはみえる。また、この頃が葦山での塾の発展期とも考えられ、大砲の試射なども盛んに行っている。山猟では携行食としてパンが使われたことを示すものがある。さて、パンが携行食として有効であることは分かっているが、果たして当時の者たちに受け入れられることができたか、次の事例をあげておこう。

49(嘉永2)年4月、天城山への狩猟において、狩猟中の米食を禁止しパンのみを使うこととして、米を持たずそれぞれがパンを携行することにした。天城の狩猟が3〜4日経過すると、多くの者が下痢を患った。しかし英龍は米食の許可を出すことはなかった。

その後、4〜5日経過したある夜半、麓の片瀬、奈良本(東伊豆町)両村の農民が狩小屋に駆け付け、先刻異国船が浦賀方面へ通過するのを見たど急報してきた。折しも降雨となったが、たいまつを灯して奈良本村へ向かった。同村へ到着するとすぐ押送船を雇い八幡野村(伊東市)の江川家の侍医でもある肥田春庵宅に到着して休息した。朝食の時、厨房をみると釜には米飯が炊きあがっている。パンのみで下痢をしているので、春庵に飯を欲しいと訴えたが、英龍はこれを許さなかった。冷川峠(伊東市と伊豆市の境)を越え、村を一つ、二つを過ぎたところにある茶店での休憩、昼食もパンのみで、夕刻に葦山に帰着した。米食を許さず、夜来寝ることなく雨をついて険悪の山道を越えた家来たちの様子を見て、英龍はようやく米飯の禁を解いた。

行動に一貫性があり、信念を持ってことにあたるのが英龍である。また食後、異国船渡来について、非常の警備にも注意を喚起したという。(江川文庫嘱託学芸員 橋本敬之)



英龍画「天城山山猟図」

江川家の至宝



重文資料が語る

近代日本の夜明け

48

江川家28代英長は、徳川家康の側室となるお万の方（養珠院殿）の養父として知られる。お万の方は、徳川御三家のうちの水戸頼房、紀伊頼宣の生母となり、これにより江川家と徳川家との深い関係が出来上がった。お万の方の出自など不明の点が多いが、一説には伊豆の大見冷川出身で、両親を失い、大平村（沼津市）の土豪・星谷家の養女となって生活し、後にそこを出て三島宿で屋敷公をしていた時、家康に見初められたという。

また一説に、北条家の遺臣正木頼忠が小田原にいた時に結婚し、直連、為春の男子と娘お方が生まれたとす。父没後、1575(天正3)年ごろに夫頼忠と離別した母が伊豆河津の笹原城主蔭山氏と再婚したため、蔭山氏広の養女となったとされ、そのため、為春は紀伊徳川家に仕え家老となった。いづれにしろ、源氏の系譜をくむとされる徳川家の側室にあるためには、源氏である江川家の養女となる必要があった。伝説が数多く、伊豆各地に伝承が残る。例えば、伊豆市加殿にある妙国寺の西側にはお万の井戸というものがある。吉奈温泉には、元和年間（1615〜23）お万の方が入湯し、水戸頼房、紀州

頼宣を授かったというので、子宝の湯といふことで評判を呼んだ。俗語に「子どもほしけりや吉奈へおいで お湯の力で子ができる」とうたわれるほど「子宝の湯」として有名になった。男子のなかつた2代将軍秀忠夫人（淀君の妹、お江）の頼みにより頼宣は一時、秀忠の養子になった。そのため、頼宣は紀州家を、頼房は水戸家を興すこととなった。三島市玉沢妙法華寺にはお万の方の尊像が安置され、当寺院の再興に尽力したとされる。墓所は静岡市清水区龍

家康の側室 お万の方の養父英長 徳川、水戸、紀州家との深いつながり

華寺。また、和歌山市和歌浦にはお万の方の院号を持つ養珠寺が建つ。英長は、徳川家康に仕えて伊豆代官職に任命された。江川家には、お万の方の熱海湯治の時、江川家を訪れたので、お万の方の三つ葉葵の御紋が付いた櫛や羽子板などの拝領品が下され、その後紀州家からの下賜品も残る。水戸家、紀州家とのつながりが大きく、享保年間（1716

〜35）代官を罷免をされた時の將軍は紀州出身の吉宗であった。その時「江川のごとは特別」という文言があり、紀州と大きな関係を示したものと思われる。また、江川の台所経営がひっ迫したとき、紀州から援助を求めよつとした。最終的に手代の望月鴻助が割腹して援助を引き出したが、これも両者の関係がなければできないことである。（江川文庫嘱託学芸員 橋本敬之）

家康の側室お万の方から下賜された羽子板



家康の側室お万の方から下賜された羽子板

江川家の至宝



重文資料が語る

近代日本の夜明け

49

英龍は1853(天保6)年に代官職を継いだ。翌54年は全国的に飢饉が深刻さを増していた年であった。

伊豆の51(天保4)年5月から8月までの間の晴天になったのは7、8日しかなかった。これに加え8月1日には大風による被害があった。この結果、伊豆各地で冷害、風害、虫害という被害が発生した。

西伊豆にある石部(松崎町)、宇久須(西伊豆町)から冷気雨天、虫付の報告があげられ、菰山役所のすぐ北側にある北奈古谷村では田高の実に4・8%が

冷害虫付によって皆無作という状況であった。

この年は、関東は大風雨に襲われ、冬から奥羽・関東は飢饉に陥っていた。幕府は対策として酒造石数を3分の2に減らすことにした。

飢饉は全国に広まり、各地で百姓一揆が多発していた。大坂(大阪)でも米不足が起り、大坂東町奉行の元与力であり陽明学者でもある大塩平八郎(この頃は養子の格

之助に家督を譲って隠居していた)は、奉行所に対して民衆の救援を提言したが拒否され、仕方なく自らの蔵書5万冊を全て売却し(6百数十両になったといわれる)、得た資金を持って救済に当たっていた。しかしこれを奉行所は「売名行為」とみなしていた。

このような世情であるにもかかわらず、大坂町東奉行である

老中・水野忠邦の実弟跡部良弼は、大坂の窮状を首みず、豪商

天保の大飢饉、決起前 大塩平八郎が訴状

捨てられた書簡 英龍の元に

の北風家から購入した米を新將軍である徳川家慶就任の儀式のため江戸へ回送していた。さらに米の買い占めにより利を図ろうとした豪商らに対して平八郎らの怒りを募らせた。

武装蜂起に備えて家財を売却し、家族を離縁した上で、大砲などの火器や焙烙玉(爆薬)を用意していた。一揆を起した際、制圧するために私塾の師弟に軍事訓練を行った。一方、豪商らに対しては天誅を加えるべしと自らの門下生と近郷の農民に檄文(主張への同意、決起を促す文書)を回し、金1朱と交換できる施行札を大坂市中と近在の村に配布し、決起への参加を呼び掛けた。

大塩は、大坂町奉行役人の汚職等を書き上げた訴状を江戸の幕閣に送っていた。そして、新任の西町奉行・堀利堅が東町奉行の跡部にあいさつに来る2月19日を決起の日と決め、同日に両者

を爆薬で襲撃、爆死させる計画を立てた。

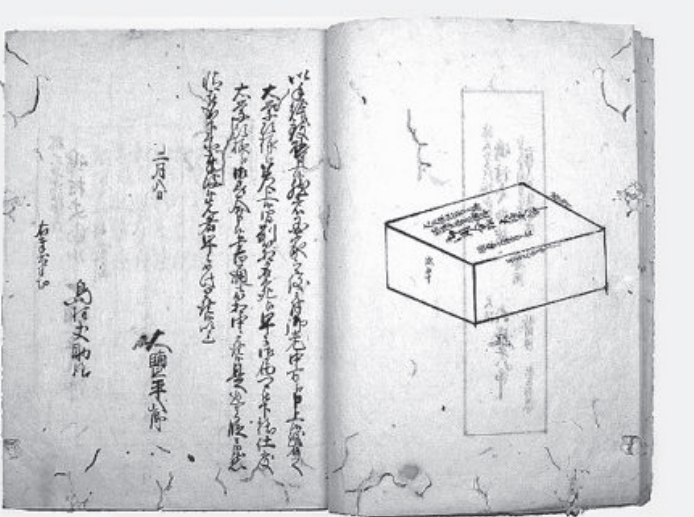
しかし、決起直前になって内通離反者が現れ、計画は奉行所が察知するところとなってしまった。跡部を爆死させる計画は頓挫し、完全な準備の整わぬままに2月19日の朝、自らの屋敷に火をかけ決起した。

大塩の告発状が入った書簡を江戸に運んでいた飛脚は、その中に金品が入っていると思っ

て箱根の山中にて書簡を開封し、金品がないと知るや書簡ごと道中に放り捨ててしまっていた。それを拾った者によって、書簡が葦山代官・江川英龍の元に届けられ、内容の重大性に気付いた江川が箱根関所に通報した。

しかし真相は建議書を幕府が受け取ってしまうと、老中の不正無尽を追求しなければならぬので、受け取らずそのまま返したところ、塚原新田で飛脚が開けてしまったということである。

(江川文庫嘱託学芸員 橋本敬之)



大塩(後素)平八郎の建議書

江川家の至宝



重文資料が語る

近代日本の夜明け

50

かいた津田梅子などが米留學を果したことは有名であるが、英武も私費留學生として米國に残留した。当初はニューヨーク州ハイランドフォールズ通學校 (High Land Falls High School) からブークスミル兵學校 (Book Skill Military Academy) へ進んだが、74(同7)年4月帰國命令を受けた。しかし、英武は海軍を辞し、自費留學生となって滞在した。75(同8)年9月ペンシルベニア州ラファイエット大学 (Lafayette College) へ入学した。26年に設立された名門校で、75年9月に大学新聞を創刊しているが、この年に入学した英武の名前を新聞で確認できる。

英龍の五男である英武は、1862(文久2)年12月、兄英敏の死によって、わずか満10歳で代官職・講武所砲術師範などを継ぎ、江川家の38代当主となった。代官在任期間は68(慶応4/明治元)年までのわずか6年間であった。

68年、戊辰戦争が起こると新政府に従い、葦山県知事となった。しかし71(明治4)年、葦山県の廃止に伴い、海軍省所属として岩倉使節一行とともに米國に留學した。

岩倉使節一行は欧州を歴訪し、そのまま帰國した。そのな

初のシC卒業生で10月に帰國し、留學中は元手代の森田留蔵

英武 岩倉使節団で渡欧 米國に私費で残留

帰國後は教育と英龍顕彰に尽力

を米國へ伴い、身の回りの世話をさせた。

森田は帰國後、米國仕込みで伊豆の殖産興業に尽力した。米留學中の写真も数多く残り、これらも重要文化財に指定された。留學中、米國人の宗教観に触れ、熱心な日蓮宗徒になる。英武は帰國後、内務省から大蔵省に奉職し、造幣局東京出張所長を最後に退職した。米國で学んだ合理主義と薩長を中心と

する政府の中で、自分の居場所がないと判断したのだろう。86(同19)年2月葦山に帰り、町村立伊豆學校から私立伊豆學校(葦山高校の前身)の校長として、原書を用いた講義をするなど91(同24)年まで後進の育成にあたった。特に1県1中學校という時代、校長として私費を投じて私立伊豆學校を存続の危機から守った。

通称太郎左衛門で米留學中の頭文字は「T・H・Y」(太郎左衛門英武江川)を使った。字は希文、号は対岳亭、春緑、翫古齋、余霞樓、免毒齋(1921=大正10=年)を使い、地元では「春緑さん」といわれた。政治に関係することを厭い、伊豆學校を辞めた晩年は父英龍を顕彰するため、その事跡研究とともに、伝来の書画・典籍の分類整理や表装、古文書の整理と目録の作成作業などを本格的に推進した。今回、この連載の原稿も英武の事跡研究に負つてころが大き

い。(江川文庫囑託学芸員・橋本敬之)

前回(49回)の冒頭に「英龍は1853(天保6)年」とあるのは「1835(天保6)年」5行目の「51(天保4)年」とあるのは「33(天保4)年」の誤りでした。



代官就任時の38代江川英武

江川家の至宝



重文資料が語る

近代日本の夜明け

51

江川家を支えた元手代・柏木忠俊は1868（慶応4）明治元年、戊辰戦争が始まる中、江川英武を助けて奔走、新政府から葦山県として認められ英武を知事とし、自らは徴士（召し出されて政府に登用）として会計官に出仕した。69（明治2）年葦山県大参事（副知事）となる。

村翁来私墓前塵

寂々鶯花古寺春

平昔欽君濟時業

精神一片在斯民

柏木の墓は本立寺（伊豆の国市金谷の山門を入り、鐘楼との中間右手にある。顕彰碑は川田剛撰文、巖谷一六書による）。

伊豆国生産会社は別名葦山生産会社ともいう。73（同6）年6月設立許可、7月20日開業。明治まで存続した葦山代官貸付金を運用して殖産興業に生かした。資本金3万円（1株50円、

維新時に京都で木戸孝允と再会するや、懇望され新政府の財政面に協力した。71（明治4）年同県廃止後に足柄県が設置されると同県参事（知事）となった。翌年権令（知事）を経て県

令（知事）となる。県令時代、小田原英語学校を創設。足柄県廃止後も、柏木は伊豆国生産会社など生糸を中心とした殖産興業と金融を指導したが、78（同

600株）で、殖産事業を發展させるための合本（株式）組織

11）年11月29日、54歳で没した。伊藤博文は柏木の実績をしのび墓前で次の一詩を残した。

心とした殖産興業と金融を指導したが、78（同

11）年11月29日、54歳で没した。

伊藤博文は柏木

の実績をしのび

墓前で次の一詩

を残した。

村翁来私墓前塵

寂々鶯花古寺春

平昔欽君濟時業

精神一片在斯民

柏木の墓は本立寺（伊豆の国市金谷の山門を入り、鐘楼との

中間右手にある。顕彰碑は川田剛撰文、巖谷一六書による）。

伊豆国生産会社は別名葦山生産

会社ともいう。73（同6）年

6月設立許可、7月20日開業。

明治まで存続した葦山代官貸付

金を運用して殖産興業に生かした。

資本金3万円（1株50円、

翌年権令（知事）を経て県

勸業金融と産業開発 異色の「伊豆国生産会社」

元手代・柏木忠俊中心に発起



柏木忠俊の肖像写真

による金融会社として設立。株式配当は行つが営利団体ではなく、社会政策的見地から勸業金融と産業開発に従事し、一般民衆には金銭、産物を救済融資するというもので、わが国金融史上特筆すべき存在であった。

具体的な目的は、①山野の開墾をする②茶、桑、楮の類を栽培する③牧畜を奨励する④鉱山を開発する⑤水産業を盛んにする⑥右（これら①～⑤）の殖産興業奨励のためには県民へ勸業資金貸付を行う⑦金融を盛んにして県民の殖産能力の増進に資する、というものであった。

この生産会社規則を起草したのは、柏木、発起人・株主には旧幕臣江川英武をはじめ、豪農・素封家が多数名を連ねる。葦山では江川英武ら官員自ら荒地地を開拓し、牧場の開発、道路の拡張、漁業の振興、薬局・製糸工場の創設を奨励、推進するなど、殖産興業に力を尽くし、県民の啓蒙指導に早くから熱心であった。その姿勢が伊豆国生産会社に引き継がれ、堅実経営をモットーに業績を伸ばし、地域金融円滑化に大きく貢献した。

行類似会社の中で、株主配当は行つが必ずしも営利を目的とせず、業績をあげた。しかも、その経営は非常に堅実であったといわれる。73年11月には早くも下田、松崎、三島に分社を開設し、金融の他、寒天製造、織物、糸繭、笠簔、その他手工業製品まで取り扱い、南伊豆方面の金融、物流の円滑化に貢献した。

また、この年には大蔵省為替取扱方をも受託、その事業は生糸生産会社などを経て伊豆国生産会社に統合され、やがて、80（同13）年12月には大場銀行と合併し、翌81年1月、伊豆銀行に発展、同行母体の一つとなった。78（同11）年6月、養蚕品評会を開くなど各種品評会を主催して産業の振興を図り、79年の葦山と松崎の2工場

で県内の製糸高の56%を生産した。生産会社の正門は葦山県庁から移し、さらに山木香山寺に移されて現在に至る。（江川文庫嘱託学芸員 橋本敬之）

江川家の至宝



重文資料が語る

近代日本の夜明け

52

「富士山画賛」と呼んでいる江川英龍の富士山図がある。これに「さとはまだ 夜深し富士の朝日影」と賛（絵に添える詩文）を入れている。また、賛の文言だけの書も残されているが、これらにも年記がない。

富士の山頂には新しい世が動き始めているように朝日が照らし始めた。しかし、里人は新しい夜明けがいつ来るとは知らず深い眠りのなかにいる。建議書が認められず、水野忠邦の失脚、鉄砲方の罷免、鳥居耀蔵との確執のなかでこの絵を描き、賛を

認めたものと思像する。現在は重要文化財に指定されているが、かつて江川文庫史料で静岡県文化財に指定された3点うちの1点である。英龍は富士山の絵をたくさん描いている。こ

状に「芳次郎及びお龜を市河三亥へ入門のお頼み」をしたいと記され、父英毅の弟陽三郎の婿養子先の関川家に入門を依頼し

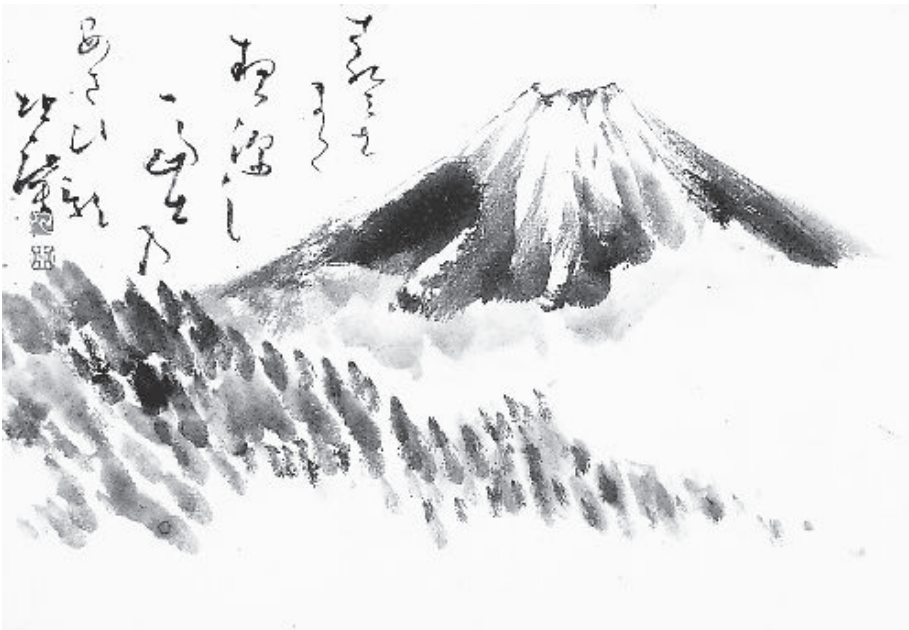
ている。数ある英龍の詩の中から「君恩難報涙漣々」の七言絶句を紹介しよう。越王勾踐が呉を滅ぼ

した時、大功のあった大夫范蠡は、ともに国を治めようという王の申し出を断り、独り閑雅を求めて五湖（太湖）に舟を浮か

べて去ったという。しかし、自分分は、そのように自らの安らぎのみを求めることはできない。主君の恩に報いることもできず、恥じ入るばかりの自分である。

数々の実績残し なお力不足嘆く英龍

書画に表現された人柄、生き方



英龍のしたためた「富士山画賛」

民生の安定に尽くし海防に奔走し、忙しさの中にさまざまの実績を残した英龍は、なお自分の力不足を痛感している。この姿勢は終生変わることがなかった。また「年積五十二鬢辺霜髮闌」の五言律詩は、晩年、国を憂い、自分の力のなさを恥じ入っている気持ちが表現され、英龍の人柄、生き方を示している（華山郷土史料館2002年平成14年度後期企画展より）。廻村（村々の巡回）の折りなど、名主宅を訪問することが多かった。伊豆各地の名主宅に英龍のしたためた書や絵が残る。漢詩にも深い造詣があり、請われればどこでも描き、認めた。当時の名主層も英龍の画才、書の才能を認めていた。（江川文庫嘱託学芸員 橋本敬之）

江川家の至宝



重文資料が語る

近代日本の夜明け

53

江川文庫には1669(寛文9)年に奉納された牛の絵馬が残る。白と黒の2頭の牛が互いに角を突き合わせている。英龍の描いた動物の中にも黒い牛がいる。黒い牛は現在では絶滅してしまった伊豆牛と思われる。

ハリスが下田に米国総領事として着任した時、牛乳を飲んだというが、賀茂郡には古くから伊豆牛という和牛が飼育されていたため、すぐに調達できたと考えられる。

『南豆風土誌』に「明治になつて一時、京浜地方で『伊豆牛』の名で名声を博した」とある。

「この牛は全身黒色で、形は小さく角は比較的大きい。特に賀茂郡の地形が険悪で道路も岩石が露出している状態なので、四肢がよく発達し、殊に爪蹄は鉄石の如くなり、形態は小さくても力は強かつた」としている。

特に伊豆西海岸に産したので「仁科牛」とも称された。この牛は山野の多いところで半牧の状態で飼育し、薪炭その他運搬に用いられ、毎戸に1頭以上は飼われていた。しかし、明治初年に外国牛が輸入され、大きさや乳量の多さに劣る伊豆牛は次第に消滅し、日清戦争の際に牛価が暴騰したので売却したためと、養蚕、^{三椏}の副業への切り替え、道路の改良によって運搬用牛畜が不用となったことなどにより、1911(明治44)年の調査時点では絶滅してしまっ

ていた。

東京府下の屠牛頭数は、明治初年には1日、1・5頭に過ぎなかったが、5年末ころには20頭、11年には25頭に増加し、東

小型だが力強い 賀茂で飼育「伊豆牛」

江川文庫に奉納絵馬 現在は絶滅



京で最も評価の高かつたのは神戸牛で、その他、津軽、会津、出雲、信州、伊豆などからの牛が供給された。伊豆牛は運搬用に使役され、肉が硬かつたため、安価であり、辻売りの煮込みなどに用いられた(『巨大都市江戸が和食をつくつた』)。

池村(伊東市)では1686(貞享3)年村差出帳によると「牛52疋(匹)頭」、1710(宝永7)年では37頭が記載されている。32(享保17)年浜村差出帳(西伊豆町)では馬36、牛91の書上があり、一色村では1842(天保13)年に馬3、牛37、大沢里村では55(安政2)年に馬3、牛125、田子村では70(明治3)年に馬3、牛67を飼育していた。1788(天明8)年、小土肥村明細帳(勝呂家文書)によれば牛46、馬20が記載されている。

人数150人ほど、平均1軒に1頭の牛、子是他村へ売るとある。1856(安政3)年の大風雨の湊村(南伊豆町)は時化によつて人家皆潰(全壊)24軒、半潰(半壊)62軒、牛小屋皆潰45軒などの被害があった。箕作村では44(天保15)年、村々様子大概書(江川文庫蔵)によれば牛73、馬1、大沢里村(西伊豆町)の69(明治2)年物産品之巻々年移高取調帳(『西伊豆町誌 通史編』)によると、「犢(子牛)三拾疋程、凡代金百式拾兩位とある。

99(寛政11)年「豆州村々様子大概書」(大田南畝「一話一言」『南豆風土誌』)の縄地村(河津町)では、家数60軒ほど、

69年(元)始まつた岩科牧場では73(同6)年和牛55頭、英牛6頭を飼育していた。宇久須村の74(同7)年物産書上帳によると、女牛45頭、男牛1を掲載している。91(同24)年の徴発物件の内牛の調査によると、那賀郡は馬の頭数33に対して牛1087頭と、伊豆の他郡に比較して多く飼育している。うち中ノ郷村215、仁科村575、田子村135、宇久須村162頭であった。

(江川文庫嘱託学芸員 橋本敬之)

1797(寛文9)年の伊豆牛絵馬

江川家の至宝



重文資料が語る

近代日本の夜明け

54

ーセットが残されて
いる。

松崎町岩科の
粘土を使って焼

いたもので、「以
足柄賀茂郡岩

科村土 西京清
水六兵衛書」と

ある。足柄県は
1871（明治

4）年末に成立、
76（同9）年ま

で続き、それ以
後静岡県に併合された。この間
に作陶されたことは明らかであ
る。おそらくウィーン万博へ出
陳する予定であったと思われる
。足柄県が殖産興業のため調
査した報告書によると、岩科村
では粘土が採れ、明治初期には
白墨も産していた。清水六兵衛
は実際に岩科へ足を運んだわけ
ではなく、県令（知事）柏木忠
俊に依頼されて制作したものと
思われる。

調査者によると、ティーカッ
プは国内で初めて伏せ焼きをし
たものではないかといつこと

あった。ティーカップやコーヒ
ーカップは口が広いので上を向
けて焼くと歪んでしまうので、

万博へ出陳予定か 清水六兵衛の陶磁器

柏木忠俊が依頼 岩科村粘土で制作

伏せて焼くようになったとい
う。口に当たる部分は釉薬が

うだ。

回らないので金箔を貼るのだぞ
うだ。

ティーカ
ップ、ティ
ーポット、
ミルクポッ
ト、シユガ
ーポットが
セットにな
って、それ
ぞれ牡丹、
藤を散ら
し、前後で
違ふ絵柄の
彩色を施し
ている。図
案は清水家
に残されて
いる。どれ
にも岩科の
土で焼いた
ことが記さ
れている。



清水六兵衛が焼いたティーセット

ものもあり、この裏側にも岩科
の土で焼いたことが記されてい
る。

「清水六兵衛展」による解説
に従って清水家に触れよう。清
水家は京都清水焼の窯元で、現
在も続いている。3代目六兵衛
は1820（文政3）年2代の
次男として生まれた。32（天保
3）年に3代を襲名、父に作陶
を学び、同時に小田海庵に絵を
学んだ。48（嘉永元）年に五条
坂芳野町に登窯を買取り、これ
により清水家は窯元としての地
位を確かなものとした。

明治時代になると、従来の内
内向け制作に軸足を置きながら
も、新時代到来にいち早く呼応
し、海外輸出向け制作も果敢に
行った。

文人、画家との交流が深かつ
た3代は文人趣味によく通じた
煎茶器のほか、赤絵、染付磁気、
土物では御本、織部などを得意
とし、「六兵衛様」と呼ばれる
スタイルを確立したとされる。
（江川文庫嘱託学芸員 橋本敬
之）

江川文庫が所蔵しているの
は、古文書や書画ばかりではな
く、日用に供される膳碗の漆器
や陶磁器、火鉢など日用雑器と
いわれる器物も数多く残る。し
かし、これらについては、制作
年代や来歴が分かるものが少な
く、残念ながら重要文化財とし
て認定されるのは難しい。

これらのうちで制作年代がは
っきりしているものを紹介しよ
う。2013（平成25）年に愛

知県陶磁博物館で開催した「清
水六兵衛展」に出陳したもので、
3代目清水六兵衛が焼いたティ

江川家の至宝



重文資料が語る

近代日本の夜明け

55

連載第1回の江川文庫資料の概要で述べたように、重要文化財に指定された写真コレクション461点は「江川家関係写真」として、写真技術の変遷が分かる貴重な明治時代前半までの資料として注目された。

また、38代江川家当主の英武は、岩倉使節団の一行として米国留学し、その際多くの写真を撮影した。その他、下岡蓮杖らの国内有名写真師のものや、海外の写真館で撮られたものも保存されている。本稿は具教育委員会刊行の『江川文庫古文書

調査報告書7』を参考に記した。

江川文庫の古写真コレクションのうち、ジョン万次郎撮影によるアンブロータイプ写真群が最も古く、特徴的なものである。アンブロータイプとは薬劑を塗布したガラス板に露出を抑えて撮影し、現像すると乳白色のネガ画像が得られるが、これを裏返して黒い布などの上に置き、反射光で直接にポジ画像としてみるものである。

土佐出身のジョン万次郎は1841(天保12)年に漁に出て漂流した後、米国船に救われて諸科学の教育を受けた。51(嘉永4)年、帰国した万次郎を江川英龍が見込んで家臣にした。万次郎は、60(万延元)年遣欧使節別行隊として咸臨丸で渡米し、サンフランシスコで写真術を学

ジョン万次郎 米国で写真学び盛んに撮影

技術変遷示す貴重資料 461点が重文に

んで写真機と薬劑を購入した。「万延元年七月十六日、夕七

ツ時写真シンブル」などと記載された包み紙にくるまれたアンブロータイプの写真が残る。写され

た小普請・小沢太左衛門は、この写真を所持していた若き当主・江川英敏の後見役(仲人)と目される人物である。

この年5

月、咸臨丸で帰国した万次郎は、芝新錢座の江川家の屋敷内に居住し、盛んに写真撮影を行った。英敏(御出府日記)には、同僚や上役の旗本らが撮影のために立ち寄ったさまが記録されている。

同教示方松平大内蔵様・川勝光之助様・(中略)、中浜万次郎江被参、写真鏡御頼之由」とある。この7月29日は講武所頭取以下6名が万次郎のもとへ撮影に訪れ、撮影の依頼を行った。万次郎が撮影したものでは侍医・肥田春庵、手代・雨宮貞道のものがあり、翌61(文久元)年撮影である。撮影時期は不明ながら英敏自身を撮影してもらったものも残る。

最後の代官となった江川英武は71(明治4)年11月12日、岩倉使節団とともに米国留学に出発した。帰国は79(同12)年である。正味8年間に米国で暮らすことになった。英武は出掛けの直前、横浜の下岡蓮杖のもとで大量の名刺写真を作成して持参した。裏面には蓮杖のスタンプが押され、蓮杖から届けられた包み紙も含まれる。留学中の米国でも名刺写真を作り、また、同級生や先輩、教職員と交換した名刺写真も多い。

(江川文庫嘱託芸芸員 橋本敬之)



英敏の肖像写真

松平仲様・講武所頭取

廿九日)、

江川家の至宝



重文資料が語る

近代日本の夜明け

56

俵がある。

伊豆では炭に
関する古い史料
として、154
2(天文11)年
12月松崎町岩科
の国柱命神社棟
札(『静岡県史
資料編7』)
に宝殿建造のた
め多くの職人は
寄進を集め、そ
の中に鍛冶炭15

になると、新技法が伝わったこと
や経済活動の活発化に伴い炭が
大量に生産・消費されるように
なる。天城山での炭の焼き出し
のため、江戸町人が明和期には

請負願を出している。その中で、
真加金として10年間で150
0両の用意があることを述べ、
いかに、炭の請負が稼げるかを
知ることができる。地元でも下
船原村の武右衛門や一色村の文
之右衛門(山本雪方)らがしき
りに請負願を出している。
江戸時代の随筆集である『嬉

遊笑覧』に「安永二年(17
73)巳二月頃、新大橋際三俣
埋立地できぬ、其頃伊豆天城山
にて始て炭を焼、同国仁科一色
村文右衛門(文之右衛門)と云
もの、運上金を差出し此事を営
む、炭を上中下に別ち売に、下
の分は粉砕けたるこな炭にて蛤
粉を焼に用しが、此時中洲を埋
め築く者ども
工夫して、こ
れを質埋めし
かばはか行て
成就すとい
ふ」とある。

敬測量隊の永井甚左衛門を中心
に測量した。『伊能忠敬測量日
記』5月5日条に、「(湯ヶ島村)
字大滝、右道下江落滝アリ。左
御用炭ヲ集会所、字車場坂」と
記され、また、5月6日条に「御
用炭焼場字大川端ト云々ある。
21(文政4)年伊豆を旅行した
書家・富秋園海若子の紀行文
『伊豆日記』には天城山を梨本
に向かつて「や、くだり行く山
のかひに、炭がまの煙いと寒け
に立つを見て、まさ木散る峯の
嵐に横をりて、煙も枝につたふ
炭かま、このわたりより炭を負
わせし牛ひきたる男ども女ども
おのがじ炭を背負ひつ、打ち
連れて下り行くめれば、こよな
うにぎほしうて、さきに登り来
し恐ろしきには、やう変りてな
ん覚ゆる」と著す。

木炭にする樹種はコナラやウ
バメガシのほか、1803(享
和3)年『天城山御用留』(江
川文庫)には、「炭木相成候雑
木之事」として猿すべり、榊、
山桐、びようぶ、山ならし、そ
の、樫、榎、水くさ、小はぜ、
白うつ木、榊、桜、楓、椿、
あせぼを書き上げている。

『日本木炭史』によると、近世
後期に海上から江戸に輸送され
る木炭は、19年平均238万
2600俵といわれるなかで、
天城御用炭は約10万俵を占め、
幕府は、天城炭のブランドの元

本丸、西丸御風呂屋御用炭と称
して嚴重に管理したという。

湯ヶ野(河津町)や天城山中にも
炭焼き人の墓が残されている。
狩野口(伊豆市天城湯ヶ島地
区の一部)では1688(元禄
元)年に、すでに湯ヶ島村で御
用炭の請負がなされ、宝暦期よ
り早い時期から御用炭の請負が
行われていた。宝暦、明和期に

天城炭はブランド 幕府御用で嚴重管理

紀州尾鷲の市兵衛が石窯法伝授



天保(18
30~43)年
間『松屋筆記
巻64』に「今
江戸にて所用
の炭は伊豆の
天城炭を上品
とす。これ堅
炭にて石窯を
築きて焼く炭
也」とある。
15(文化12)
年5月5日、
第9次伊能忠
之(江川文庫嘱託字芸員 橋本敬

江川家に残る天城山御用留

第9次伊能忠

之

橋本敬

江川家の至宝



重文資料が語る

近代日本の夜明け

57

でも越すが、越すに越されぬ大井川：「(正しくは大井川ではなく「大晦日」という説もある)とうたわれたように、箱根と大井川は東海道の2大難所であった。

当初開かれた

西坂は箱根竹を敷いてローム層で滑らないように工夫したが、この道づくりのため毎年、入金120〜130両、人足約3千人、竹1万7千〜8千束が必要であった。

24(寛永元)年、朝鮮通信使

が箱根を越え、その時の紀行文『東槎録』に「峠の道は険しく、富士山と相對しており、天外の

群峰は眼前であった。細竹は山に満ち満ちており、喬木は天

に交わり、日本の大きな峠であ

る。…竹を切つて雪をおおつて

いたので乾いた土を踏むようであ

った。…その道に敷いた細竹

は皆矢を作るものであり」と記

す。

箱根馬子歌に「箱根八里は馬

子歌に「箱根八里は馬

東海道の難所 箱根 三島代官が度々補修

葦山へ統合以降 江川氏が管理

載され、滑らないよう急がしう

えて雪の上に細竹を敷いたのである。

61(寛文元)年、浅井了意は『東海道名所記』に西坂を下る

様子を「雨ふりには馬も人もす

べりて、しりもちをつく、よこ

なげにする、手足も泥にまぐれ

になりてはふくくたる」と、雨

の箱根ロームの滑りやすさを表

現している。

2年後に通行する朝鮮人一行

のため、80(延宝8)年、江戸

町人請負で石道を敷設した。石

道は相模・伊豆の境界から三島

川原ヶ谷の橋まで約11¹/₂の区間

で経費金およそ1406両を要

した。石道が完成すると、それ

を維持管理するために伊豆の村

々に対して強制貸付となる箱根

石道金で運用した。街道管理は

代官の仕事

で、幕府発

足以来三島

代官がこれ

に携わつ

た。



箱根山絵図の関所部分

「箱根山内石道破損修覆仕帳」(三島市郷土資料館保管)。

1826(文政9)年3月1

日には、オランダ商館医師シー

ポルトも石道を歩き、「たたと

きには道は荷を負った馬には非

常につらかった。なぜならこ

では舗道のように敷かれた石

は、人馬が普通はく糞靴のため

にすっかり減っていたからであ

る」と記す(『江戸参府記』)。

道幅は約2間(3・6¹/₂)と

され、道の両側には松や杉が植

えられ人馬を保護した。42(天保

13)年、土手築立、並木植付けの

請書が記録として残る。松杉の

並木、一里塚、石畳が現存してい

る。最大の普請は、61(文久元年

孝明天皇の妹・和宮内親王が、

14代將軍徳川家茂に嫁ぐとき行

った大補修といわれる。

現在の石畳は、三島市が19

94(平成6)〜97年に5カ所

(願合寺、腰巻、浅間平、上長

坂、笹原各地区)の発掘調査と

整備事業に伴い復元したもので

ある。

(江川文庫嘱託学芸員 橋本敬

之)

後藤文書

橋本敬

江川家の至宝



重文資料が語る

近代日本の夜明け

58

文右衛門重年に嫁いでいる。

30代英利の存生期間は1625(寛永2)年から66(寛文6)年である。33(寛永10)年、8歳で遺跡を継ぎ、すぐに代官となる。「家譜」によると41(同18)年江戸大火の際、葦山の采地(領地)松林の大樹2万8千本余を献上し、家譜並びに「江戸真砂六十帖」によると明暦年中(55〜58年)江戸城造営の際、棟木1本を献上している。42(寛永19)年、朝鮮通信使来朝につき小田原の稲葉氏と箱根宿の警護にあたった。巴藤紋の什器(日常使う道

江川家は代官であり旗本である。そのため輿入れした相手の家も代官や旗本の家柄である。輿入れの時持参した、いわゆる嫁入り道具もたくさん残されている。その一部を紹介したい。29代英政は榊原大内記照久(久能山東照宮の初代神主)の娘を妻として迎えた。29代以後江川家へ嫁いだ女性が江川家系図に記されている。

30代英利は旗本大久保右京亮教隆の娘を迎えた。大久保氏の家紋は巴藤である。嫁ぐ時持参した長持をはじめ、この方の器物がたくさん残っている。江川

家に嫁ぐ時持参した器物はたくさんあるが、どなたが持ってきたか判明しているのは、実は大久保氏だけである。ちなみに英利の妹は富士川の雁がね堤を築いたことで有名な代官・古郡

具、家具)は英利に嫁ぐ時持参したものである。17世紀半ばの作品群といふことになる。多種多様で、衣桁、鏡台、お櫃、野

英利の妻持参 巴藤紋の器物

代々の嫁入り道具残るも由来不明

点弁当箱など、しっかりと漆塗りて家紋を入れたもので、鑑賞に堪えるものである。31代英暉の妻は金森左兵衛義女、32代英勝の妻は大岡三郎右衛門直源の娘、33代英彰の妻は辻寛左衛門守輝の娘、34代英征の妻は大岡友二郎英氏の娘、35代英毅の妻は安藤如淡次香の娘

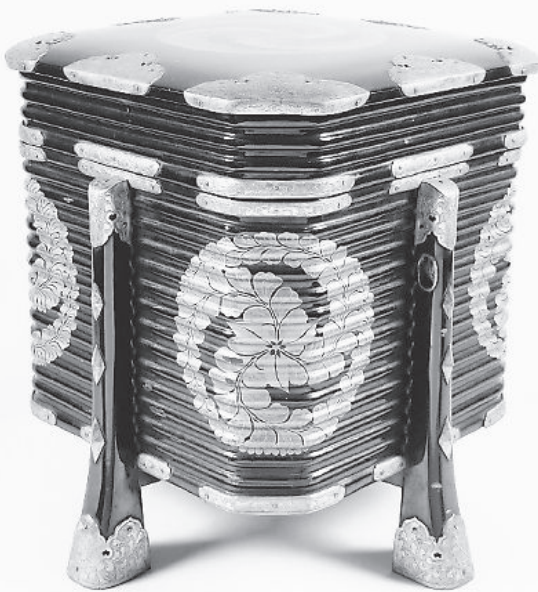
で英龍の母久である。36代英龍は北条氏政の娘越を娶った。37代英敏の妻は石川氏(名は不明)から嫁いだとある。英敏は麻疹のため若くして亡くなってしまったため、再婚を勧められたが、一生独身で過ごすと言明していた。残念ながら英敏の後を追うように病没してしまった。

当たり前だがこのように多くの方が江川家に嫁し、嫁入り道具も、貝合わせや漆器などたくさん残っているが、大久保氏の特例を除き、誰が持参したのか、その由来ははっきりしない。また、妻となった人たちの名前が判明しているのも少ない。

34代英征は俳号を寿梁といっただ。夫妻で俳句をたしなみ、妻の俳号は花盟である。仲睦しく互いを尊重していたことが残された手紙から読み取ることができる。特に花盟の作句、合点を付けた俳句や句集がたくさん残っている。しかし、名前は分からない。

英龍、英毅兄弟の手紙のやりとりが大量に残り、久の人となりを知ることが出来る。英龍の妻の人柄を示す史料は今のところ未発見である。江川家に嫁いだ方々の名前も人柄も、知ることが出来る史料は少なく、江戸時代が男の時代であることを痛感する。

(江川文庫嘱託学芸員 橋本敬之)



大久保氏の巴藤紋のお櫃(ひとつ)

江川家の至宝

重文資料が語る

近代日本の夜明け

59

1744(延享元)年天城山内の岩尾地蔵伽藍、滑沢2カ所で試作したことから天城の山葵は始まり、1802(享和2)年の湯ヶ島村年貢割付状に「山葵運上(課税)」が記される。

08(文化5)年には「山葵仲間」がでぎ175軒が記録され、郷沢と称する仲間の山葵沢【12(同9)年「天城山狩野口山葵植付場所見分案内絵図一石渡家文書」と、個人で天城山内に借地した山葵沢があり、狩野口だけで68(明治初)年には8町8

反に及んだ。また、3カ村共同で山葵を栽培する郷沢を持つていた。

山葵の試植は湯ヶ島、市山、門野原の狩野口3カ村が仲間で始めたが、利益が上がるようになると12(同9)年にはその利益を巡って争いも起こっている。3カ村の刎銭(収益の一部を取る)のうち半分は棟別、半分は高割ということに解決した【12(同9)年「内済証文」小森家文書】。

その年江川家では土産用として早くも湯ヶ島村から90本を仕入れている。また、郷沢として岩尾ばかりではなく吉奈洞(伊豆市吉奈)でも栽培を始め、1792(寛政4)年の栽培に関する帳面が残されている。



江川英龍が描いたと思われる、当時まだ一般的でなかった山葵を紹介する絵と文

0(44)になると生産が大きく伸び、39(天保9)年から47(弘化4)年の記録では金6000、700両の安定した収入があった(湯ヶ島足立家文書)。また、山葵の品質も定められ、「大極上16文4分、大物14文、中12文5分、並10文、葉付き12文5分、葉柄1把32文」と相場も決められるようになった。

1824(文政7)年「甲申旅日記」は湯ヶ島村から梨本村までの行程を詳細に記し、「このあたりことに山葵多し」とあり、すでに山葵栽培が盛んにな

っていたことが分かる。幕末になると天城山内には広範囲に山葵沢ができ、狩野口ばかりではなく、文化年間(1804~18)には大見口、さらに箱根山南麓から連なる下畑村などでも栽培が始まった。

天城山中で山葵を栽培とある。片瀬村では27(文政10)年に栽培が始まったとされ、66(慶応2)年8月「片瀬村山葵冥加永年切替調書」が出されている。仁科口では20(文政3)年2月、「山葵試み植付」の一札が宮内

村(松崎町)の植付主から天城山仁科口を管理する御林守に出され、7月に初植付がなされた(西伊豆町中奥田家文書)。湯ヶ島村を例にみると、文化年間ころ、山葵は小物成(雑税)であったが、天保年間(1830~)

当初2カ所で試作

山葵栽培各地で盛んに

伊豆東海岸から江戸へも出荷

伊豆の山葵は天城御林守・板垣勘四郎が、駿州有東木村(静岡市)から持ち帰り試作したのが始まりといわれる。しかし実際、椎茸師(栽培技術の指導員)として各地を回った勘四郎が有東木村にも出掛け、山葵栽培を実見しているだろうが、山葵は全国に自生しているという事実から、その栽培方法に着眼し天城山中で試作したのが事実である。

『上狩野村誌』でも「山葵に関する伝説」に「又伝フ、当時天城山中二山葵同一ノモノ野生シタリシガ時ノ人其ノ山葵タルコトヲ知ラザリシナリト云ハレタル。

地蔵堂村(伊豆市)では06(文化3)年から山葵の栽培を天城山中で開始とある(「山葵最初事并出入取扱事萩原家文書」。

江川文庫に残る44(天保15)年の「村々様子大概書」の筏場村(伊豆市)の項に、農間に男は

大量に生産されるようになった山葵は、狩野口では瓜生野村分一番所を経由して、竹で編んだ山葵籠に入れて伊豆東海岸の宇佐美(伊東市)などから船で江戸へ送り出された。31(天保2)年、湯ヶ島村の重右衛門が丹那村名賀山に沢山葵の指導を行い、丹那の山葵栽培が始まる(「根府川通見取絵図」)。32(同3)年、浜奉行木村喜繁は伊豆葉園御用として西浦河内山御林を巡見した帰途の土産として干し鮎、椎茸、山葵を用意している(『伊豆紀行』)。江川家でも山葵を地元で購入し、土産として盛んに使っていた。(江川文庫嘱託学芸員 橋本敬之)

江川家の至宝



重文資料が語る

近代日本の夜明け

60・完

情報をまとめてもらい、建議に役立てようと考えていたものと思われる。斎藤弥九郎がこの件に大きく関わり、英龍宛て書状で「華山方より右書類図共一切見合

越し呉れるよう申すよつに」伝達している。「天保七年和蘭人地球中ノ風聞申上候書付」の入手もその一端であろう。斎藤弥九郎や華山といった知己を得、大きなネットワークを築いていた。そのなかにいたのが英龍で、ネットワークに支えられたといっても過言ではない。

水戸家、紀州家は、初代華山代官英長が後見となってお方の方を徳川家康に嫁がせ、頼房、頼信を産んだことから始まった。ここから両家と大きなつながりが生まれた。

オランダ語、砲術など、全てを知った上で部下を動かした。日本がオランダ語で西洋との接点を求めている時、これからは英語の時代とジョン万次郎を家

せ、残らず不用になれども、帰国の節持参いたすべく」と書き、『西洋事情書』の送稿について、英龍宛て華山書状で「アジア・欧州の地勢図したため方の詳細」を述べ、英龍は斎藤弥九郎を通じて、「渡辺登へ西洋火術・馬術其外地球中風聞書共差

水戸斉昭の前で琴を弾いた英龍の逸話は有名である。斉昭は英龍が何でもこなす力を持っていることを承知していたが、まさか琴が弾けるとは思っていな

来た。今度も最終回となります。今年余の間、講読して下さった方々に感謝申し上げます。また、本稿の提案をしてくださり、江川文庫の価値を多くの方々知っていただく機会となったこと、さらに構成や校正ではたいへんお世話になりました伊豆新聞の皆さんには深く感謝します。

来た。そこで、英龍を呼んで琴を弾くように命じた。英龍は祖母・花盟が琴を弾いていたのは見ていたが、弾いたことはいと固辞した。しかし、斉昭が執拗に所望するので、決断して弾くことになった。突然だったが、その腕前は斉昭をうならせた。1887（明治20）年ごろ描いた錦絵がある。86（同19）年創刊の『やまと新聞』311号で扱っている。日刊なので、そのころと断定した。錦絵になるほど、ちまたで流布した話であった。

来にする先見性を持っていた。歴史に「たら」「れば」はないというが、不透明な現代社会において、「もし英龍が現代社会に生きていれば」「英龍が長生きしていれば」現代社会をどう見据え、来たるべき時代をどう乗り切り、舵を取ったらよいか、私たちは英龍の生き方に学ぶ点が多数あると思う。

す。今後も江川文庫資料保存のために、一人でも多くの方にお力添えをいただければ幸いです。（江川文庫嘱託学芸員 橋本敬之）

やまと新聞に掲載された「琴を弾く英龍」の錦絵

権力に抵抗して新しい時代を切り開いた人物は英雄として祭り上げられるのが常である。幕末の志士と呼ばれる人物は、その典型である。その主役は吉田松陰で、明治政府の中心となった長州出身者の教育を担ったことから、とりわけ英雄視されている。しかし、幕末の志士より一世代前に活躍した英龍は、英雄としては扱われないが、新しい時代の先駆けとして豊かな人間性と教養、代々築いてきたネットワークを駆使して躍動した。

渡辺華山と英龍との付き合いは深く、『西洋事情書』で外国

現代も学ぶ点多い

英龍の生き方

豊かな教養、ネットワーク活用の先見性

近世人物誌



発行所 文芸春秋社
〒100-0001 東京都千代田区千代田1-1-1
電話 03-5561-0111